

元 塚

発掘調査報告書

2005年3月

芦屋市教育委員会

元 塚

発掘調査報告書

2005年3月

芦屋市教育委員会



Ⅳ期元塚（南から）



Ⅰ期元塚（南から）



Ⅰ期元塚と溝1・2（南東から）



溝1 石造物出土状況および土層断面（南から）

序 文

阪神・淡路大震災から、今年で10周年を迎えました。本市は震災によって甚大な被害を受けましたが、10年の歳月を経て、ようやく落ちつきを取り戻しつつあります。また、復興事業に伴って膨大な件数の埋蔵文化財発掘調査が実施されましたが、その調査成果によって本市の歴史は充実してきています。

さて、本書で報告する元塚は、古墳と言われ伝えられてきた伝承墳です。かつて、本市には幾つかの伝承墳がありましたが、元塚を除く伝承墳は近現代の開発によって破壊されてしまいました。そして、今回、市内で唯一封土が現存する伝承墳であった元塚も消滅した結果、市内の伝承墳はすべて地上から姿を消したことになります。

今回の発掘調査では、元塚が室町時代（14世紀後半～15世紀）に築造された塚であることが明らかとなりました。さらに、4期の変遷を経て現在に至ることもわかりました。

塚は全国どこにでも存在する決して珍しいものではありませんが、発掘調査例が極めて少なく、その具体的な内容がほとんどわかっていないことから、元塚が発掘調査されたことによって、その築造時期や構造、遺構の性格などが解明された意義は大きいと言えるでしょう。

本書が郷土の歴史について関心を深めていただく一助となり、さらに学術研究および教育資料として広く活用していただければ幸いです。そして、今後とも文化財保護へのご理解をお願いしたく存じます。

発掘調査および本書の刊行にあたりましては、事業者をはじめとして、春日町の住民の方々、本事業の関係者各位には多大なご協力をいただきました。最後になりましたが、厚くお礼申し上げます。

平成17年 3 月 31 日

芦屋市教育委員会
教育長 藤原 周三

例 言

1. 本書は、芦屋市教育委員会が共同住宅の建設に伴い事前調査を実施した元塚^{もとづか}（第1地点）の発掘調査報告書である。
2. 元塚は、兵庫県芦屋市春日町349番地に所在する。兵庫県遺跡地図（平成16年3月刊行）では遺跡番号070022となっており、よみがなは「もとづか」で登録されているが、昭和30年代までは「もとばか」と呼称されていたことにちなみ、本書では「もとばか」と呼ぶこととした。
3. 本発掘調査の実施ならびに本書の刊行にあたって、事業者である野村不動産株式会社からは、多大なご協力を得た。本発掘調査費並びに遺物整理費・報告書刊行費は、野村不動産株式会社が全額負担した。
4. 本発掘調査は、芦屋市教育委員会社会教育部文化財課学芸員 竹村忠洋と同文化財課嘱託 白谷朋世（学芸員）が担当した。調査に係る事務は、文化財課長 西川孝夫、同課主査（文化財担当）森岡秀人（学芸員）・主査（総務担当）田中尚美、竹村が担当した。発掘調査および遺物・資料整理作業・報告書作成には、文化財課臨時的任用職員 天羽育子・池田計彦・喜多川綾・水津真実・高橋美代子・仲谷由利子・西岡崇代・前田礼子・山田みゆきが従事した。
5. 本書の編集は、竹村・白谷が担当した。報告文の執筆は、竹村・白谷・森岡が行い、目次と文中に氏名を掲げて、その分担と責を明らかにした。資料整理・報告書作成は、竹村・白谷の指導の下、遺物洗浄・註記を喜多川・西岡が行った。遺物実測は山田が行い、挿図の製図は水津・山田が担当した。遺構写真は、竹村・白谷が撮影した。遺物写真は西岡・前田の助手を得て、竹村・白谷が撮影した。
6. 本書に掲載した地図は、第8図が国土地理院発行5万分の1地形図「大阪西北部」（平成11年要部修正）図幅、第9・33図が芦屋市発行2千5百分の1基本図「芦屋駅」「香櫨園」「芦屋浜」「打出浜」（平成10年3月修正）図幅、第10図が〔清水編1995〕で使用された参謀本部陸軍部測量局発行2万分の1仮製地形図「西宮町」（明治18年測量）「今津町」（明治17年測量）図幅・陸地測量部発行1万分の1地形図「西宮北部」「西宮首部」「東芦屋」「芦屋」（昭和7年修正測図）図幅をそれぞれ使用した。
7. 挿図中に「M.N.」と表示した方位は、磁北を用いている。磁北は真北より6°40′西に振っている。標高は、東京湾平均海水準（T.P.）で表示している。
8. 本報告に関わる遺物、写真・実測図等の調査記録は、芦屋市教育委員会社会教育部文化財課三条整理事務所において保管している。広く活用されることを希望する。
9. 発掘調査状況のビデオ撮影記録は、山本徹男氏（市内在住・映像作家）に依頼した。
10. 発掘調査および整理作業の過程で、下記の方々から御助言・御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。

井阪康二 勇 正廣 石井 啓 海邊博史 海邊麻理子 楠 貴大 河野克人 合田茂伸 坂田典彦
関野 豊 辻 康男 中川 渉 西川卓志 西山昌孝 仁部壽夫 濱野俊一 藤川祐作 古川久雄
的崎 薫 森 大作 (50音順、敬称略)

目 次

序 文
例 言
目 次

第1章 はじめに

- 第1節 本発掘調査に至る経緯 (竹村忠洋) ... 1
- 第2節 調査体制 (竹村) ... 2
- 第3節 調査の経過 (竹村・白谷朋世) ... 3

第2章 位置と環境

- 第1節 地理的環境 (竹村) ... 7
- 第2節 歴史的環境 (竹村) ... 8

第3章 発掘調査の概要

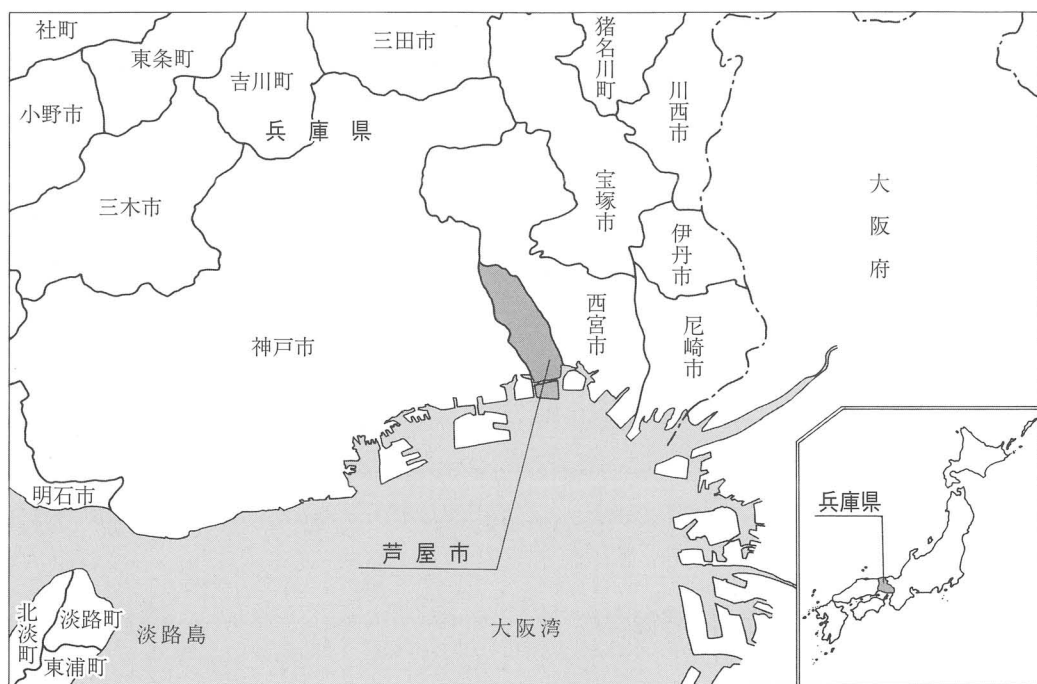
- 第1節 発掘調査の方法 (竹村) ... 11
- 第2節 基本土層 (白谷) ... 12
- 第3節 遺 構
 - (1) 元塚 (白谷・竹村) ... 15
 - (2) 溝 (竹村・白谷) ... 26
- 第4節 遺 物
 - (1) 元塚出土遺物 (白谷) ... 31
 - (2) 東区および溝1・2出土遺物 (白谷) ... 33
 - (3) 石造物 (竹村・白谷) ... 34

第4章 まとめ

- 第1節 元塚の変遷 (竹村) ... 37
- 第2節 元塚と周辺の伝承墳 (竹村) ... 38
- 第3節 おわりに (竹村) ... 40

付 章 元塚断章 — 30有余年前の考説から — (森岡秀人) ... 41

引用・参考文献 43



兵庫県と芦屋市の位置

第1章 はじめに

第1節 本発掘調査に至る経緯

兵庫県芦屋市春日町349番地（敷地面積2882.45m²）において、鉄筋コンクリート造地上5階・地下1階建共同住宅の新築計画が持ち上がったが、当該敷地は周知の埋蔵文化財包蔵地である元塚^{もとばか}の分布範囲内であったため、事業者である野村不動産株式会社大阪支店取締役支店長高橋俊昭氏は、文化財保護法第57条の2第1項に基づく発掘届出書を平成15年7月14日付で、本市教育委員会に提出した。

届出書を受理した本市教育委員会は、建築計画の概要を審査し、工事掘削によって元塚が損壊すると判断した。当塚はいわゆる伝承墳と位置付けられており、既往の調査では昭和52年7月7日に春日土地区画整理事業の一環である神戸製鋼所(株)芦屋研修所敷地南縁部の宅地造成に伴い緊急調査が実施されている。しかし、工事と併行しての実働1日の調査であったために詳細な記録がなされておらず、不明な点が多かった〔森岡1977〕。そこで、緊急調査では検証できなかった元塚の築造時期や性格を明らかにし、今後の取扱いを判断するための基礎資料を得る目的で、文化財課学芸員竹村忠洋・同課嘱託白谷朋世（学芸員）を調査担当者として、平成15年7月24日から7月30日まで、実働5日で確認調査を実施した（調査面積5.3m²）。その結果、元塚の築造が少なくとも近世後半まで遡ることが明らかとなった〔竹村・白谷2003a〕。しかし、植栽などのためにトレンチを設定する範囲が塚の西半部に制限されたことから、中核部を含めて未確認の部分が多く、中世以前に築造されたものではないと断定するには至らなかった。また、内部施設の有無や築造時期について、具体的に検討できる資料を得ることができなかった。さらに、墳頂に現存している石造物は、15～16世紀の石造物3基分の部材から構成されており、出土遺物の年代と相違した。そのため、未だ不十分とみなされる当塚の築造時期や前身遺構の存否など、より明確な性格について明らかにするために、改めて第2次確認調査を実施する必要があると判断した。

第2次確認調査は、竹村・白谷両名を調査担当者として、平成15年9月1日から9月12日まで、実働10日で実施した（調査面積23.2m²）。その結果、現在の元塚（Ⅳ期）の前身遺構である長方形を呈する塚（Ⅰ期元塚）が確認された〔竹村・白谷2003b〕。そして、元塚には少なくとも3期におよぶ変遷があることが明らかとなった。

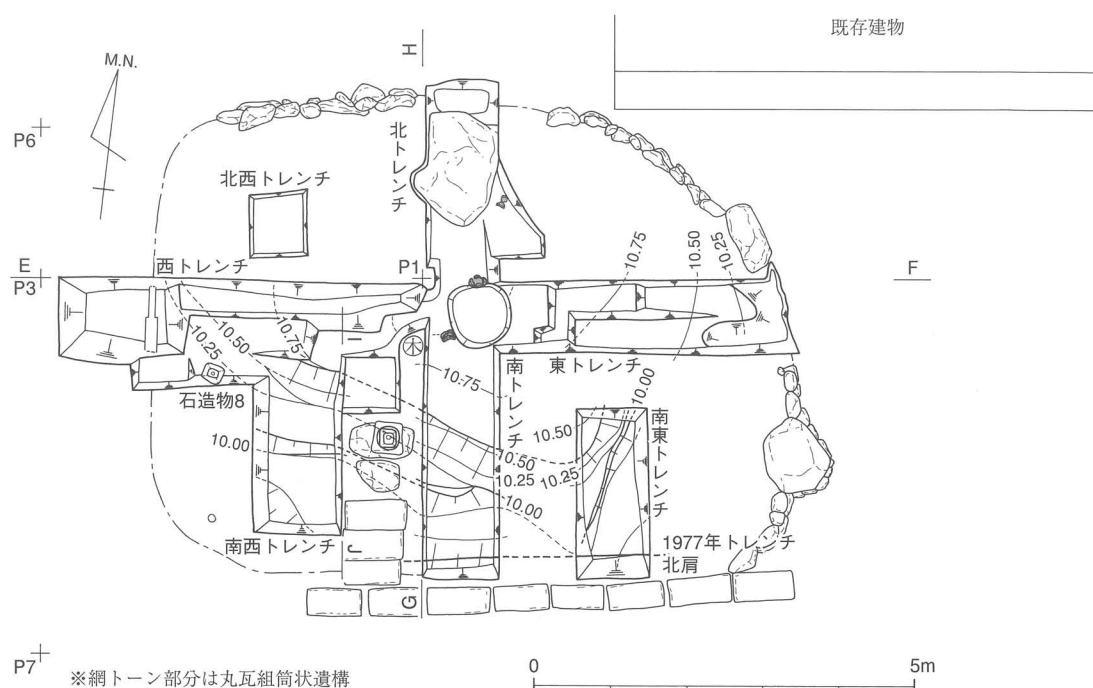
以上のように、2次にわたる確認調査によって、Ⅰ期元塚が中世後期に築造されたことが明らかとなっ



第1図 調査地近景（南西から）



第2図 第2次確認調査（北西から）



第3図 第2次確認調査トレンチ配置図 1/100

たが、当該事業に対する埋蔵文化財の取扱いとしては、計画建物建設工事によって当塚が全壊し消滅することから、兵庫県教育委員会とも協議し、当塚を記録保存するために本発掘調査が必要と判断された。

なお、確認調査は1次・2次ともに平成15年度の国庫補助事業として実施した。

第2次確認調査後、文化財課と事業者の間で協議した結果、本発掘調査は平成15年11月4日から12月15日まで実施することになった。調査担当者は文化財課竹村・白谷となった。発掘作業は、東海アナーズ株式会社に委託することになった。発掘調査および整理作業、報告書印刷・刊行までに伴う費用は、事業者が全額負担することになった。

(竹村忠洋)

第2節 調査体制

本発掘調査は芦屋市教育委員会が調査主体となり、以下の体制で実施した。

(竹村)

芦屋市教育委員会 教育長 藤原周三

社会教育部 部長 小治英男 (平成15年度) 高嶋 修 (平成16年度)

文化財課 課長 西川孝夫

主査 森岡秀人 (学芸員、文化財担当)

主査 田中尚美 (総務担当)

学芸員 竹村忠洋 (確認調査および本発掘調査担当)

嘱託 白谷朋世 (学芸員、確認調査および本発掘調査担当)

調査補助員 天羽育子 池田計彦 喜多川綾 水津真実 高橋美代子 仲谷由利子

西岡崇代 前田礼子 山田みゆき

第3節 調査の経過

現地における発掘調査は、確認調査を平成15年7月24日から7月30日まで、第2次確認調査を平成15年9月1日から9月12日まで、本発掘調査を平成15年11月4日から12月15日まで実施した。本発掘調査中には、現地説明会を12月7日に開催し、市民に調査成果を公開した。

発掘調査終了後は、文化財課三条整理事務所において遺物・図面・写真整理等を行い、平成16年度には本報告書の作成・編集を行った。

以下に発掘調査日誌抄を掲げて、本発掘調査の経過および作業内容の概略を示す。(竹村・白谷朋世)

【本発掘調査日誌抄】

平成15年（2003年）

11月4日（火） 晴れ

発掘調査開始。既存建物の解体工事用の防塵シートが調査区に接するように設置されており、瓦礫が防塵シート伝いに落下する様子がみえ、工事の音がやかましく響く中、現況を撮影する。その後、確認調査時に設置した基準杭の残存状況を確認し、新たに設置する基準杭や調査区について打ち合わせを行う。基準杭は、確認調査時のものに加えて新たに5本を設置し、元塚周辺部分の調査範囲は、東西12m、南北8m程度とした。加えて、東部確認トレンチは、確認調査時の東トレンチの延長部分に設定し、塚頂の基準杭（以下、「P1」と呼称する。）から東方へ35m程度までとした。

確認調査時のトレンチを仮埋めした土を取り除き、山本徹男氏のビデオ撮影後、芝生やA層を除去したところ、北西部で新たに丸瓦組筒状遺構を1基確認した。

11月5日（水） 晴れ

重機が搬入され、いよいよⅣ期元塚上の石造物が撤去される。土嚢袋で表面を保護してトラロープを用い重機で吊り上げて移動する。その後、芝生やA層の除去を継続し、北東部と北西部においてそれぞれ丸瓦組筒状遺構を1基ずつ確認する。しかし、今日は、昨日以上に建物の解体工事の影響が著しく、午後からは調査区北側（元塚の北東部と北西部）には安全対策のため立ち入ることができなくなったため、作業は専ら調査区西側および南側に制限された。調査区西側および南側の塚裾部分は塚の残存状況を確認しながら、重機により攪乱土を除去する。西側は鉄管や電線の敷設により、塚裾部の残存状況は悪いようである。また、調査区南側も1977年の造成工事の際、思った以上に旧地形が損なわれていることがわかったので、当初予定より調査

区を北に1m縮小することにした。

11月6日（木） 晴れのち曇り

昨日以上に建物解体工事の影響が著しく、安全対策から塚部分には立ち入れないため、東部確認トレンチを中心に調査を行う。このトレンチを重機掘削し、基盤層まで掘り下げて旧地形の確認を行ったところ、P1から東に約9mのところ、溝状の遺構を確認し、さらにその東1m（P1から東約10m）の箇所、その溝状遺構の底において五輪塔の水輪1石が出土した。この溝状遺構（以下、「溝1」と呼ぶ。）は幅3.5m程であるが、西側斜面の傾斜は急で、西側斜面沿いの幅90cm程がやや深く、東側は緩やかに上昇する。あるいはこの西側の深い部分が、Ⅰ期元塚の南側周溝に対応するのかもしれない。

塚の東側は谷状になっているか、あるいは既存建物の建設時にすでに攪乱を受けているものと考えていたが、思いのほか残存状態がよく、溝1の東側基盤層はその上端が概ね水平に推移する状態が確認できた。東部確認トレンチはP1から東へ約26mまで掘削し、土層断面の撮影および土層註記、土層断面図（縮尺1/20）とトレンチ平面図（縮尺1/50）の作成を行った。

11月7日（金） 晴れ

東部確認トレンチの土層断面図とトレンチ平面図の作成を行い、実測図作成後にトレンチを重機で埋め戻し、重機を搬出した。なお、東部確認トレンチの3層からは、土器と瓦が出土している。

森岡主査と今後の調査方法について現地で協議を行い、野村不動産海老島氏に状況を説明し、東海アナース末次氏と今後の発掘調査の進め方について話し合った結果、建物解体工事の関係でしばらく調査を中止し、17日に再開することとなった。



第4図 東部確認トレンチ（南東から）

11月17日（月） 晴れ

調査再開。元塚の北側の建物解体工事は概ね終了していたので、安全面では条件がよくなっているが、解体箇所との間に防塵シートがなくなり、解体に伴う埃の飛散が多い。

先日掘開した東部確認トレンチに沿って東区を新たに設定し、重機掘削を開始する。東区は、東部確認トレンチ北壁から南に5mの範囲を重機掘削して遺構の検出を行うとともに、東部確認トレンチ北壁から北に0.6mの範囲は分層発掘して、遺物の包含状態を確認する計画である。重機掘削の結果、東部確認トレンチで確認していた溝1がほぼ直線的に南北に延びている様相を検出できた。この遺構について、先日はⅠ期元塚の南側周溝に対応するかもしれないと考えていたが、別の遺構であり、溝1の西肩は元塚に向かって3段の雛壇状を呈していることがわかった。東区の調査と併行して元塚のA層除去と、元塚南側の土層の検証、土層断面図の作成を行う。

11月18日（火） 晴れ

東区で検出された溝1の人力掘削を行う。東区南端は1977年度の造成工事によりすでに旧地形や遺構面が失われているため、調査区南端から約1.2m北に控えたところに土層観察用の土手を設け、土層断面図を作成する。東部確認トレンチでは溝1の底面は未検出であったので、この土手沿いにサブトレンチを設けて溝1の底面を確認し、溝1の埋土についても再検討した。溝1内からは9個体の五輪塔の部材が検出され、その多さに一同驚く。東区北側の分層発掘では、わずかに中世後期の土塀や丹波焼、備前焼片が出土したが、その量は極めて少ない。

11月19日（水） 曇り一時雨

文化財課田中主査・宮根氏や、森岡主査・坂田囑託・天羽調査補助員らが現地来訪。山本徹男氏によるビデオ撮影



第5図 調査風景

も行われる。昨日の溝1内出土の五輪塔について検討したところ、出土層位によって様相を異にしており、溝1の最上層（①層）からは一石五輪塔が、溝1の中層（⑤層）からは一石五輪塔が、溝1の下層（⑧層）からは五輪塔の部材が出土しており、層序と遺物の新旧が大凡合致しているようである。

ベルトコンベヤーやストープを搬入。作業は、元塚のA層除去の状態を撮影するために清掃を行い、写真撮影する。その後、ベルトコンベヤーを設置してB層および攪乱土を除去する。また、昨日に続いて土層断面図の作成を行い、東区に基準杭（P1から東へ13mと16m）を設置する。

11月20日（木） 雨

降雨のため作業を中止した。

11月21日（金） 曇り一時雨

元塚のB層および攪乱土の除去を継続する。塚南西部は照明灯設置時にほとんど攪乱を被っているものと考えていたが、案外塚盛土の残存状況が良いようであり、土層断面図の修正を行う。一方、塚南東部では、東トレンチ南壁で検出していた焼土層が塚盛土（B層）より下層であるので、現代の攪乱ではなく遺構と認識すべき可能性のあることがわかった。実測図については、元塚のB層除去状態の平面図（縮尺1/50）を作成し、南半はほぼ終了する。その後、B層除去（C層上面検出）状況を撮影し、ベルトコンベヤーを移設する。

11月25日（火） 曇り

昨日来の雨が多く溜まっており、その除去に手間取る。溝1の土層観察用土手ははずし、石造物の出土状況を撮影。予想に反して土手部分からは石造物の新たな出土はなかった。その後、引き続き石造物15を取り上げ、その下の島状の土手も掘削した。元塚はB層除去状態の平面図の作



第6図 現地検討会（2003年11月27日）

成を継続し、北西部以外は終了した。元塚で検出した遺構らしきものを半掘したところ、遺構とみなせるものはなかった。その他、東区の攪乱の段下げも行う。

11月26日（水） 晴れ

元塚はB層除去状態の平面図作成後、C層の除去を開始したところ、南東部では炭化物層が広がっている状態を検出した。北東部は思った以上に東側が攪乱されていることも判明した。C層除去の終わった地区からC層除去状態の平面図（縮尺1/50）の作成を開始する。辻氏が現地に來られたのを機に、溝1部分の土層の再検討も行い、溝1の埋没過程と溝1上の土層の意味合いを検証する。

11月27日（木） 晴れのち曇り

溝1を撮影する。元塚はC層の除去が終了した後、撮影を行う。天気は下り坂ということで、撮影に都合がよい。C層除去状態の平面図および、南東部の炭化物層の検出状況平面図（縮尺1/10）を作成する。平面図の終わった南西部からD層の除去を開始したところ、やはり南西部西側は攪乱が広範囲に広がっているようで、再検討が必要となる。現地検討会を開き、井阪康二氏、合田茂伸氏、西川卓志氏、濱野俊一氏、古川久雄氏が來られ、多くの有益な御教示をいただいた。

11月28日（金） 雨のち曇り

降雨のため作業を中止した。

12月1日（月） 曇り

今日から12月。さすがに風も冷たくなり、師走の到来を実感する。先週末の雨はまだ沢山溜まっており、調査地点の水はけの悪さを証明している。溝1は完全に水没しており、出土状態のまま現地においていた石造物の一部は転落していた。おそらく機能していた頃の溝1も雨が降ると水が溜まり、しばらく濠のようになったのであろう。溝1埋



第7図 現地説明会（2003年12月7日）

土のうち、下層に細かいラミナがみられることと合致しそうである。今日は、海邊夫妻の見学あり。

水を汲み出し、崩れかけた調査区法面を補修しながら、元塚のD層除去を継続する。塚の南西部の照明灯設置に伴う攪乱は、やはり当初考えたように基盤層上面まで掘り込んだ大きなものであることがわかり、攪乱土を除去した。南東部の炭化物層も半掘したところ、明らかに近代に下る紙刷りの磁器碗が出土したことから、D層上面は近代まで機能していた遺構面であることが判明した。このことから、元塚の変遷はI期～IV期となった。D層と合わせてE層の掘削も開始し、元塚周溝の範囲確認を行う。そのほか、炭化物層のレベリングも行う。

東区では基準杭にレベルを落とした後、平面図（縮尺1/50）の作成を行い、引き続いて石造物出土状況実測図（縮尺1/10）の作成を行った。

12月2日（火） 曇り時々晴れ

昨日に続いてE層の掘削を行った後、写真撮影を行う。元塚の北西部西端において、基盤層が残存しているようにみえた部分のほとんどが、実はⅢ期以降に鉄管を埋設した部分を基盤層起源の白色粘土で塗り固めた部分であることがわかり、塚の西裾部は残存していないことがわかった。F層上面検出状況の平面図・等高線図（縮尺1/50）の作成を開始し、塚の南西部は終了。

東区の溝1以東の平坦部において遺構面精査を行う。石造物の出土状況平面図は出土レベルの異なる石造物14を除いて終了。溝1埋土（東区北壁）の土層断面図註記も終了した。

12月3日（水） 晴れ

昨日に続いて、東区の溝1以東の平坦部において遺構面精査を行い、遺構検出に努めるが、小さな溝状の遺構が少

し確認できるのみである。石造物の出土状況平面図および立面・断面図は完成。その後、自然石か否かが争点となっていた石造物16を取り上げたところ、石仏であることが判明した。

元塚はF層の掘削を続けるが、F層からの出土遺物は極めて乏しい。元塚南側傾斜面の方向と塚南側裾部の周溝の方向は若干違いがある。元塚東部分において基盤層と考えていた橙色粗砂・砂礫層はしまりが極めて悪く、汚れていることや、灰白色シルト層（H3層）との層界がほぼ垂直に落ちることから、森岡主査に人為的遺構の可能性を指摘され、その確認のため東トレンチを東に延長し、さらに掘り下げることにした。

3時からは記者発表を行う。近隣住民の方で、現地を見学に来られた方もいる。

12月4日（木） 晴れ

兵庫県教育委員会中川氏や神戸市教育委員会関野氏が見学に来られる。

周溝に堆積しているF1層を除去し、写真撮影。その後、F2層の掘削にかかる。周溝の南肩が元塚に向かって突出している部分があり、その部分だけ溝幅が狭くなっている。板などをさし渡して通り道としていたのではないかと考えている。

東トレンチの深掘を行い、土層を観察する。橙褐色の盛土層である③層の直下から18世紀中頃～後半の近世遺物が出土したので、この盛土層がⅡ期元塚に関するものと考えられそうである。この盛土の性格は不明であるが、土層断面をみると、溝状であるので、「溝2」と呼称する。

12月5日（金） 晴れ

溝1と溝2の土層断面図を作成する。ちなみに溝2の⑤層と、溝1の①層のレベルはほぼ一致する。さらに、南側の周溝を主としてⅠ期元塚の平面図・等高線図（縮尺1/50）を作成する。

山本徹男氏によってⅠ期元塚をビデオで撮影するため清掃を行うが、天気良すぎて夕方まで撮影できず。仕方がないので、東区の掘削や写真撮影を行い、部分的に現地説明会の準備を行う。ビデオ撮影後は、東トレンチ深掘部の拡張を行って溝2の続きを検出し、東トレンチ深掘部以北の①層の除去を行う。

ところで、元塚南東部から北東部に延びる溝2をどう解釈するべきであろうか。元塚の東崖や溝1とは方向が異なるようであるし、この東崖が一体いつ作られたのかも判断

し難い。もし、Ⅰ期元塚形成時であれば、果たして溝1まで石造物が転ぶものであろうか。また、周溝との関係はどう解釈すればよいのであろうか。

12月7日（日） 晴れ

午前中は、現地説明会の準備をした。午後1時から3時まで現地説明会を開催し、市民約150名が見学した。現説後に、西山昌孝氏より石造物の製作年代について御教示していただいた。

12月8日（月） 晴れ

元塚南東部の溝2③層を掘削したところ、くらわんか碗片が出土。③層の下はほとんど水平な面をもつ基盤層のようである。

溝1の石造物の取り上げにかかる。完掘したところ、溝1の最下層（⑧層）から陶器片が出土した。北壁沿いは下層確認の断ち割りを行い、土層図に追記を行う。東区の溝1以東も再精査し、浅い沼状の堆積を除去した。

Ⅰ期元塚の等高線図は南側が終了する。Ⅰ期元塚も精査したところ、ピットとみられるものを少し検出した。塚南西部の西の攪乱部分にも周溝が延びることを確認した。

12月9日（火） 晴れ

Ⅰ期元塚の北部の平面図、等高線図を作成する。

12月10日（水） 曇り

全景の撮影を行う。

図面の追加・補足（溝1土層断面図・元塚南壁土層断面図・Ⅰ期元塚断面図・元塚東部平面図・等高線図）を行う。

12月11日（木） 曇りのち雨

発掘調査最終日。今日は重機を用いて東区を北に拡張し、元塚上の巨石を除く。溝2下層部の⑤層の範囲は極めて限定されていた。同様に、溝1の⑥層も北壁までは延びていない。一方、拡張した溝1部分の東肩付近（④層）から石造物2個が新たに出土し、土砂降りの雨の中で平面図・立面図（縮尺1/10）を作成し、石造物を取り上げる。

12月15日（月） 晴れ

器材・資材などを現場から撤収。この時には、すでに調査の終了した元塚上に重機が入り、元塚を縦横無尽に破壊しており、何とも言えない気分であった。1時から現地で調査終了協議を行う。出席者は文化財課森岡・竹村、野村不動産株式会社海老島氏、株式会社鴻池組の中島氏、東海アナース株式会社末次氏であった。調査の結果を簡単に説明し、発掘調査によって元塚の記録保存を完了したことを報告し、今後の工事立会について協力を依頼した。

第2章 位置と環境

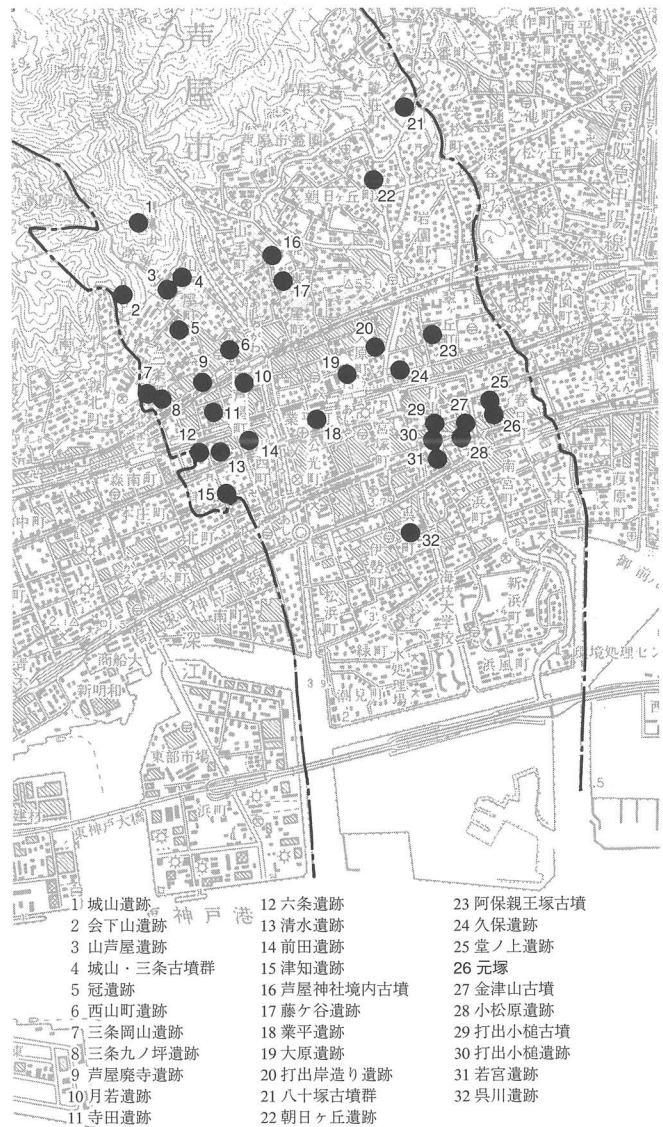
第1節 地理的環境

元塚が所在する芦屋市は兵庫県の南東部、阪神間に位置する都市で、人口は92,218人（平成17年1月1日現在）となっている。市域の形状は南北に細長く、その規模は東西約2.5km、南北約8.3km、面積18.57km²を測る。地理的には六甲山地南側に位置し、六甲山地と大阪湾に挟まれた東西に細長い平野部を中心に現在の市街地が展開している。当平野は神戸平野とも呼称され、狹隘であるために昔から東西交通の要衝となっている。市域の地形は北半部に横たわる六甲山地と大阪湾に挟まれた北高南低の変化に富む地形となっており、山地・丘陵・台地・段丘・沖積扇状地・沖積低地・砂州・浜堤・砂浜が形成されている〔辻2002・2003、辻ほか2003〕。市内を流下する主要河川は、芦屋川と宮川であり、それぞれ西と東を潤している。

元塚は現在の春日町に所在する伝承墳で（第8・9図）、「元墓」の字も当てられる〔細川1963〕。また、地域住民からは「蛇塚」と呼ばれている〔森岡1977〕。旧小字では打出村字寺開地に位置しており、地名からは北側の「堂ノ上」と合わせて寺に深く関係する土地であったことが推測される（第11図）。

付近の標高は約10mを測る。当該地周辺にあたる宮川流域の地形をみると、標高18m付近を境に上流域には更新統である大阪層群や段丘礫層および基盤岩である花崗岩が分布しており、中・下流域には段丘面や沖積扇状地面が広がっている。中・下流域では、左岸と右岸で様相が異なり、左岸側では翠ヶ丘丘陵と呼称される大阪層群で構成される丘陵が六甲山地から南方へのびてきており〔辻2002〕、阪急電鉄神戸線付近（標高15m付近）より南では比較的平坦な段丘面の広がり認められる（第33図）。一方の右岸側では、沖積扇状地が分布している。

このような地形・地質的環境の中で、元塚は段丘の突端に立地している。元塚が築造された地点と西側の江尻川が形成した開析谷との比高差は約5mを測り、当塚は眺望の良い段丘崖の縁辺に築かれたと考えられる（第33図）。



第8図 芦屋市内主要遺跡分布図 1/50000



第9図 元塚周辺遺跡分布図 1/10000

なお、元塚の南方約30mには、西国街道（本街道）が走っていた（第9・10・32・33図）。芦屋市域において西国街道は本街道と浜街道に分岐していたが、打出付近では本街道が昭和50年代に施行された春日土地区画整理事業によって消滅し、区画街路である鳴尾御影線に姿を変えている。一方の浜街道も国道43号線の建設によって消滅しており、その面影はまったく見当たらない。（竹村）

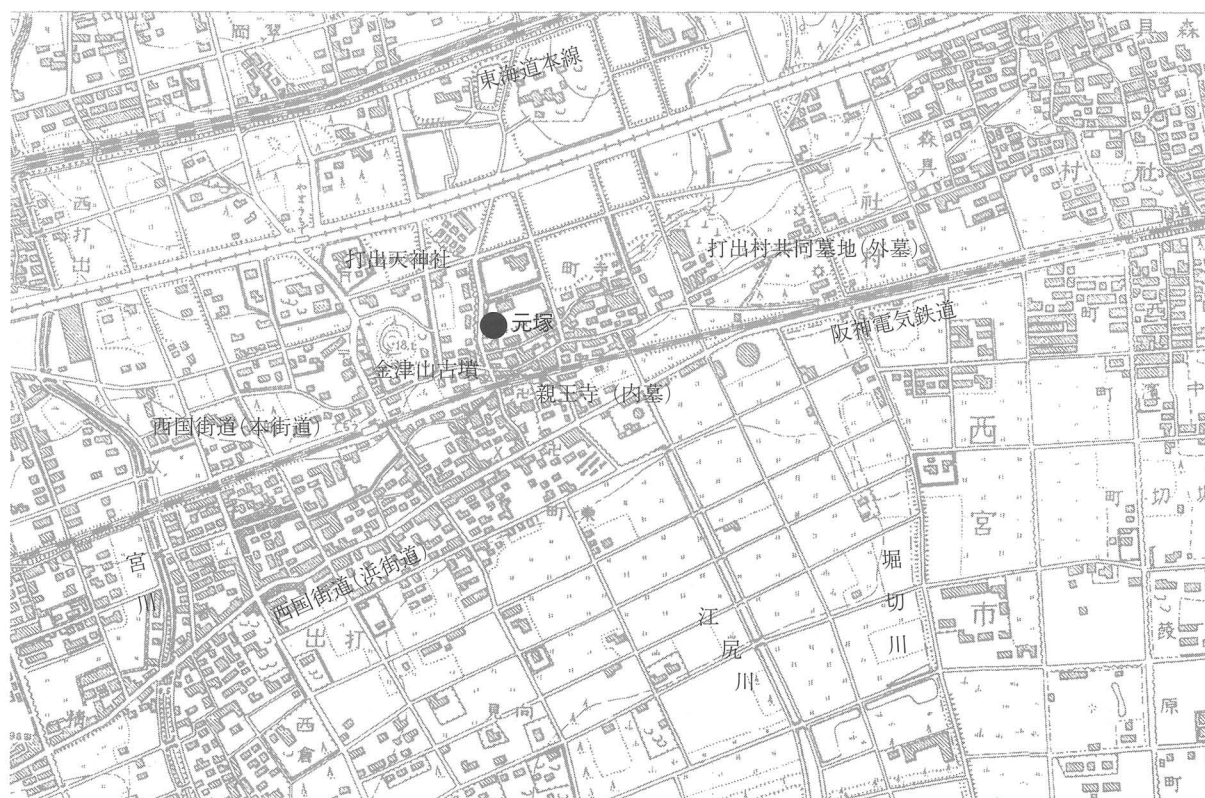
第2節 歴史的環境

市内には、後期旧石器時代から江戸時代にわたり遺跡が数多く分布しており（第8図）、歴史的環境は大変恵まれている〔森岡・竹村編2001、兵庫県教委2004〕。元塚が位置する宮川中流部左岸域においても遺跡が多く分布しているが〔辻2002など〕（第9図）、ここでは元塚と関係が深い中世以降の遺跡と翠ヶ丘古墳群、伝承墳に限りて記述する。

元塚周辺における中世の遺跡としては、久保・堂ノ上・打出小槌・若宮・金津山古墳が挙げられる。その大半は耕作地であったようであるが〔森岡・白谷編1993、森岡・竹村編1999、竹村編2002〕、若宮

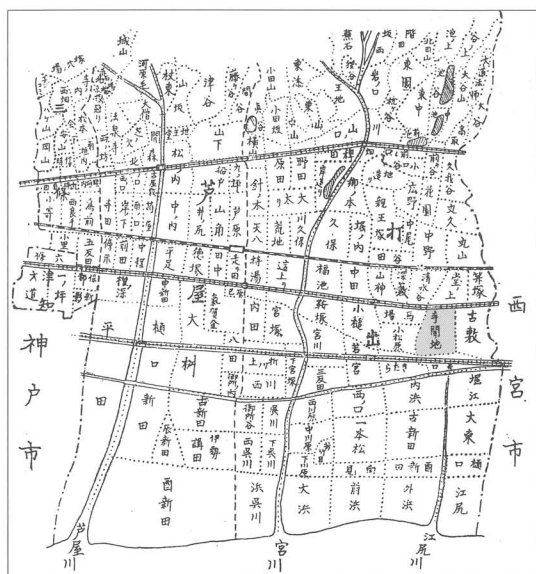


明治18年(1885年)測量 1/10000(〔清水編1995〕に加筆)



昭和7年(1932年)修正測図 1/10000(〔清水編1995〕に加筆)

第10図 明治・昭和初期の打出地域



第11図 芦屋市旧字名図〔魚澄編1956〕

遺跡では室町時代の柱穴群や井戸などが確認されている〔竹村編2002〕。近世には、西国街道（本街道）沿いに打出村が形成される。打出村の寺社には、打出天神社と、明治41年（1908）に当神社に合祀された金毘羅神社（字下宮塚）・春日神社（字寺開地）・若宮神社（字若宮）・南宮神社（字北羅）・巖島神社（字小松原＜金津山＞）、そして親王寺がある〔芦屋市教委1979〕。打出村の墓地には、内墓と呼ばれるものが親王寺をはじめとする寺院の境内にあり、外墓と呼ばれる共同墓地が打出村の東端にあたる字古敷にあった（第10・11図）〔細川1963〕。

次に翠ヶ丘丘陵上に分布する古墳と伝承墳について述べるが、当丘陵上には、前期の阿保親王塚古墳、中期の金津山古墳・打出小槌古墳が築造されており、市域において前・中期の大型古墳が集中して分布している。また、駒塚古墳は石室図があり、横穴式石室墳と断定されている。そして、四ツ塚は出土品から後期古墳と推定されている。これら前期から後期の古墳は、合わせて翠ヶ丘古墳群と総称されている。なお、四ツ塚の出土品には石製帯飾具が含まれており〔武藤・有坂・末中・村川編1971、森岡2003〕、古代古墓も含まれていた可能性が高い。

以上の古墳・古墓は遺構や遺物から築造時期が検討できるが、これら以外に築造時期をはじめ内容が明らかでない伝承墳が分布している（うの塚、筭塚、鞍塚、牛廻し塚、大藪小藪塚、元塚、宮塚）。これらの伝承墳については、昭和15年に印刷された『打出史話』に記載がある。当文献は、天王寺谷勘太夫氏が、郷土の歴史について多くの資料を拠り所として詳細に記録したものである。当文献には各々の伝承墳について、所在地・現状・伝承などが記載されている。しかし、記録や伝承には史料的根拠が乏しく、これら伝承墳の中には古墳でないものが多く含まれていると推定されるが、伝承墳そのものとは異なる祠社として昭和初期の状況を留める鞍塚（第13図）と、発掘調査が行われた筭塚〔森岡1986b〕・元塚を除いて、調査によって内容が解明されることなく、開発により地上から姿を消した。

なお、打出地域では西国街道沿いを中心に中・近世石造物が多く遺存していることを付け加えておく（第12・13図）〔芦の芽グループ文化財パトロール委員会1973、「芦屋のお地藏さん」研究会2001、田辺・森岡・位原1979〕。



第12図 江尻川の地藏堂（調査地の西側に所在。南東から）



第13図 鞍塚の石造物（南東から）

第3章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の方法

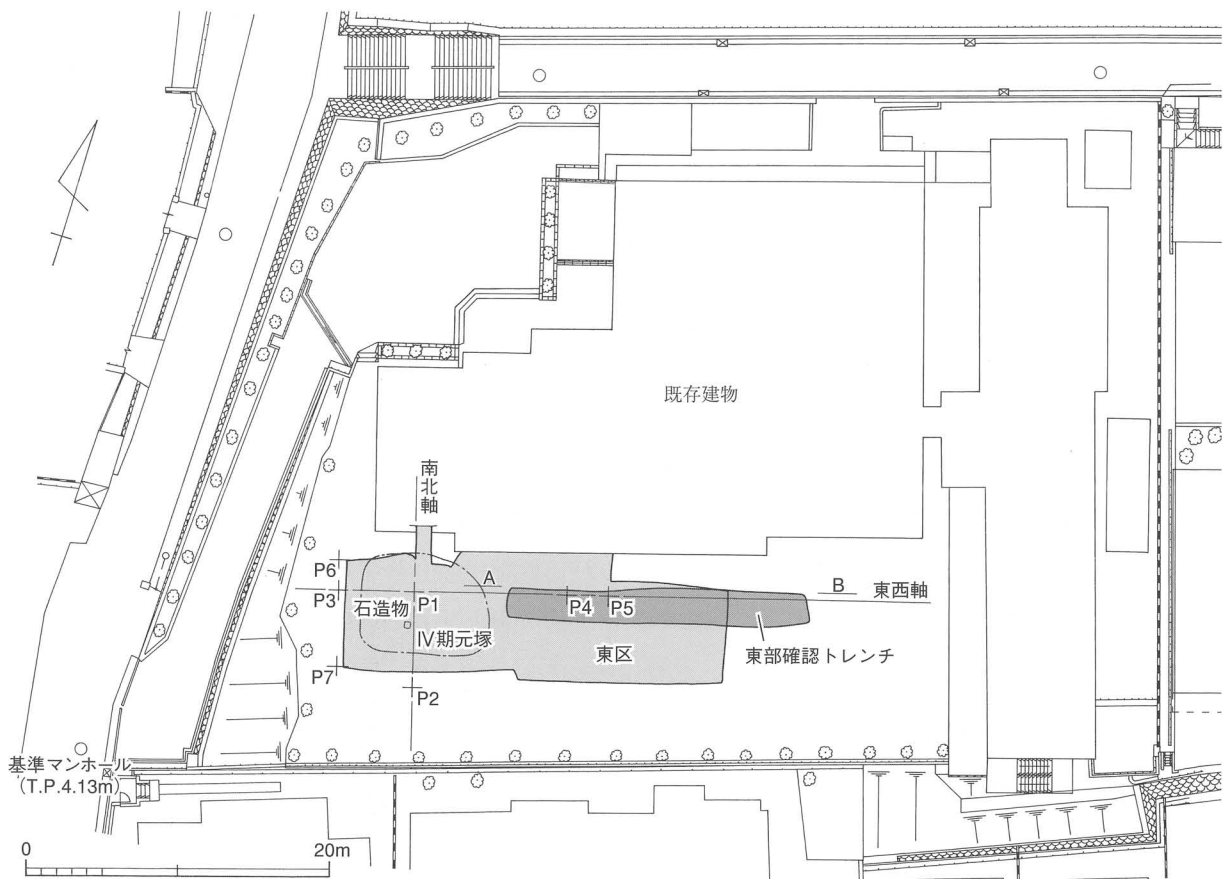
当該敷地はすでに鉄筋コンクリート造の建物が建設されており、その大半は攪乱されていた。その中で元塚は、南側庭部に築山状に保存されていた（巻頭図版1、図版1）。

発掘調査の範囲については、2次にわたる確認調査の結果、元塚全体が本発掘調査の対象となったが、その東側に広がる庭部分については既存建物解体後に重機（0.1㎡）を搬入し、東西に長い東部確認トレンチを設定して埋蔵文化財の有無や攪乱の状況を確認した。その結果、溝1とそれに伴う石造物が検出され、また、攪乱もほとんど受けていないことが確認されたため、急遽、元塚東側の庭部分全域を「東区」と呼称して、全面発掘調査することとなった（第14図、図版4）。

発掘調査の深度については、工事影響深度が当地点の基盤層である大阪層群より深くなるため、基盤層上面までを対象とした（第15図、図版2）。結果として、調査面積は元塚と東区あわせて165㎡となった。調査深度は、最深部で標高8.3m、現地表面から約2mの深さとなった。

基準座標は、Ⅳ期元塚の主軸（磁北から7°15′西に振る）であるP1とP2を通るラインを南北軸とし、塚頂（P1）で直交するP3・P4・P5を通るラインを東西軸と呼称した（第14図）。

掘削方法について、元塚では周辺の攪乱を除いて、地表面からすべて人力で行った。元塚を築成する



第14図 調査区配置図 1/500

盛土を一層ごとに掘削し、4期の変遷が認められる元塚を各期で検出した。東区では、近世の稀薄な遺物包含層である3層までを重機(0.25㎡)で除去し、4層(基盤層)上面を遺構面として検出した。なお、掘削で生じた残土は、すべて場内に仮置きした。

記録は、写真と実測図で行った。写真は、35mm白黒ネガ、カラーポジの2種類のフィルムを使用した。実測図は、調査区配置図・平面図を縮尺1/50、調査区土層断面図を縮尺1/20、遺構平面図・断面図を縮尺1/10・1/20でそれぞれ作成した。平面実測では、光波測距器を用いた。基準高は、敷地西側の南北道路に設置されたマンホールの上面高(T.P.4.13m)より得た。

埋め戻しによる現状復旧は、事業者との協議の結果、行わなかった。

(竹村)

第2節 基本土層

確認調査では、元塚に限ってトレンチを設定したので、元塚以外の土層についてはまったく不明であった。そのため、本発掘調査では、埋蔵文化財の有無や攪乱の状況を把握するため、東部確認トレンチを設定して土層確認を行ったところ(第4・14図)、元塚で確認した土層とは対応しない層を新たに検出した。そこで、基本層序は拡張した東区において設定し、元塚とは区別することにした。ちなみに塚部分と対応した層は、現表土層(1層)および基盤層の大阪層群(4層)のみである。その他の土層は遺物の出土が極端に少なく、時期の比定は困難であった。土層番号は上から順に付し、色調や土質に若干の違いが観察されたものは、土層番号にアルファベットの小文字を付して細分、表示している。また、塚部分の土層はアルファベットの大文字で、遺構埋土は丸囲いの数字で表記している。なお、土色は『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)に依った。

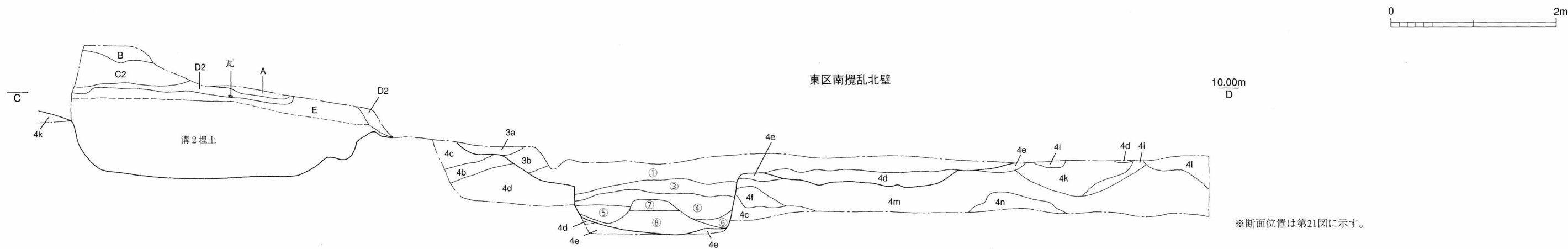
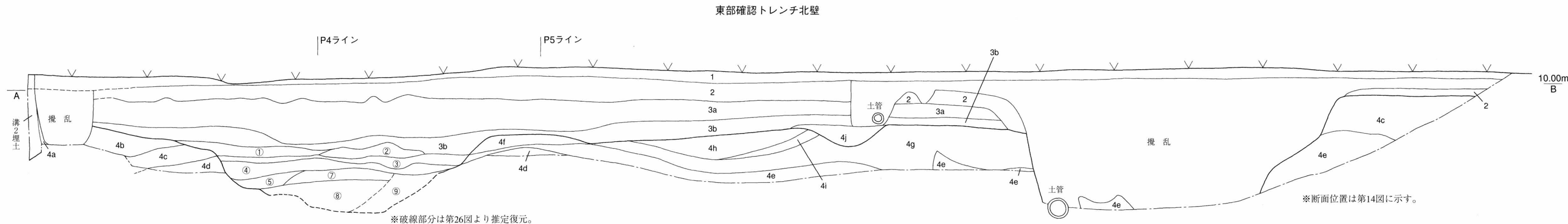
東区で検出した土層は、上から現表土の1層(A層に対応)、旧表土の2層、耕作土と考えられる3層、基盤層である4層(H層に対応)と、溝1埋土の①～⑨層である(第15図、図版2)。以下、各層について述べるが、調査区南側の攪乱北壁でも、元塚から続く土層断面図を作成したので、第15図に合わせて示す。

1層は現表土で、芝生の下置き土も含む。先述したように、A層に対応する。

2層は土壌層で旧表土と考えられる。元塚との境界部分は攪乱を被っており、時期を特定できる遺物の出土もないのでB層との対応関係は不明だが、同時期の土層である可能性は否定できない。

3層は耕作土と考えられ、下方ほど粘性が強い。3a層は炭化物を含むが、かなり均質な層である。一方、3b層は基盤層起源の粘土や粗砂のブロックを含む部分がある。なお、東区東部では、2層直下が基盤層になっており、3層は存在していない。3層からは土師質土器・須恵器・陶器・磁器などの細片が出土し、3a層出土の遺物の中で最も新しいものが18世紀中頃～後半のくらわんか手の碗や行平塼であるので(第30図)、18世紀後半までに形成された土層である可能性が高い。一方、3b層出土の遺物は土師質の土塼や中世の備前焼片などで、近世に明らかに下るものは含まず、この層の形成時期が近世に下るかどうかは定かでない。3a層はF1層(I期元塚の削り出し面に堆積した層)に色調や土質が似ており、3b層は基盤層起源の粘土や粗砂のブロックを含むという特徴が、F2層(I期元塚の削り出し面に堆積した層でF1層の下位に位置する)と共通する。仮に3a層がF1層に、3b層がF2層に対応するならば、2層は元塚のⅡ期やⅢ期に対応する旧表土である可能性が考えられる。

4層とした基盤層は大阪層群であるが、土質の差が著しいことから、4a～4n層に細分している。



- 1層 現表土。A層に対応する。
2層 褐灰色(2.5Y4/1)砂質土。旧表土。B層との対応関係は不明。
3a層 におい黄褐色(10YR5/3～10YR 5/4)細砂質土～中砂質土。炭化物や土師器の小片を含む。かなり均質な土。F 1層に似る。
3b層 におい黄褐色(10YR5/4)～におい黄褐色(10YR6/4)砂質土。やや粘性あり。3a層より黄色がかかる。基盤層起源の粘土や粗砂のブロックを含む部分あり。
4a層 明黄褐色(10YR6/6)砂礫。粘土ブロックを含むが総体的に粘性はない。
4b層 におい黄橙(10YR6/3～10YR6/4)粘性細砂～中砂。ラミナがみられる。
4c層 明黄褐色(10YR6/6)～橙色(7.5YR6/8)粗砂。ラミナがみられる。
4d層 灰白色(2.5Y8/2)～明黄褐色(10YR7/6)中砂～粗砂。しまりは良好。ラミナがみられる。
4e層 灰白色(10YR8/1)～橙色(7.5YR6/8)シルト～粘土。4d層に類似するブロックが含まれるところもある。
4f層 黄褐色(10YR5/6)～におい黄褐色(10YR5/3)砂礫混じり粗砂。極めてしまりの悪い層。
4g層 明褐色(7.5YR5/8)～明黄褐色(10YR6/8)粗砂。細砂の部分もある。ラミナが顕著にみられる。西側ほど灰色がかかる。
4h層 明黄褐色(10YR6/8)～浅黄色(10YR7/4)細砂～中砂。葉状ラミナが顕著にみられる。
4i層 におい黄橙色(10YR6/4)～明黄褐色(10YR6/6)中砂～粗砂。ラミナがみられる。

- 4j層 におい黄橙色(10YR7/2～10YR7/3)粘性シルト。
4k層 灰白色(5Y7/1～7.5Y7/1)シルト～中砂。4i層に対応する層か。
4l層 黄灰色(2.5Y4/1)～黒褐色(2.5Y8/2)砂質土。
4m層 灰黄色(2.5Y7/2)～明黄褐色(10YR7/6)細砂～中砂。4g層や4i層に似る。下部ほど粗くなる。
4n層 灰オリーブ色(5Y6/2)～オリーブ黄色(5Y6/3)粗砂。4e層に似たブロックを含む。
※南攪乱北壁で確認した4f・4g・4h層は、東部確認トレンチ北壁より鉄分の沈着が乏しく、若干色調が異なる。

A～E層は元塚の土層で、第16図の土層番号と対応している。
①～⑨層は溝 1 埋土で、第26図の土層番号と対応している。

大阪層群には、元塚を中心に精良なシルト～粘土の部分がある一方で、東区で検出したものにはラミナが観察され、水流によって堆積したことがわかる層が大半を占める。この部分は大阪層群が地上に隆起した後に形成された谷の埋没を示すものかもしれない。そうであるなら、元塚の東にはかつて幅20mを超える谷が存在しており、その西側に元塚の基盤となる高まりがあったと考えることができる。ただし、元塚の基盤層にもシルトと砂層の互層堆積が観察されるように、大阪層群中には砂層が存在しているので、ここではひとまず基盤層を一括して大阪層群とみている。ちなみに、東区東端の3層が存在しない地点の基盤層検出レベルは標高10m程度であり、3層の存在する地点の基盤層検出レベルはそれより約40cm低い。これは、元塚より東側の本来の地形が現状のように水平ではなく、元塚から東に向かって緩やかに上昇していたことを反映しているのであろう。

なお、元塚や溝1・2は基盤層を削って構築されている。

(白谷)

第3節 遺構

今回の発掘調査によって、元塚の築造時期が室町時代（14世紀後半～15世紀）にまで遡ることが明らかとなった。さらに、当塚には少なくとも4期の変遷があることが確認できたので、古い順にⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期、Ⅳ期と呼称することとした。各段階の築造時期は、出土遺物から、Ⅰ期が中世後期～末期（14世紀後半～15世紀）、Ⅱ期が江戸時代後期（18世紀中頃～後半）、Ⅲ期が近代（20世紀前半）、Ⅳ期が現代（1977年）と推定される。また、元塚より東側において、室町時代に遡る溝1（15～16世紀）や、元塚の東側を削ったと考えられる溝2（18世紀）が検出され、さらに東区東部には耕作に伴うと考えられる浅い溝が検出された。以下、元塚と溝に分けて、それぞれを記述する。

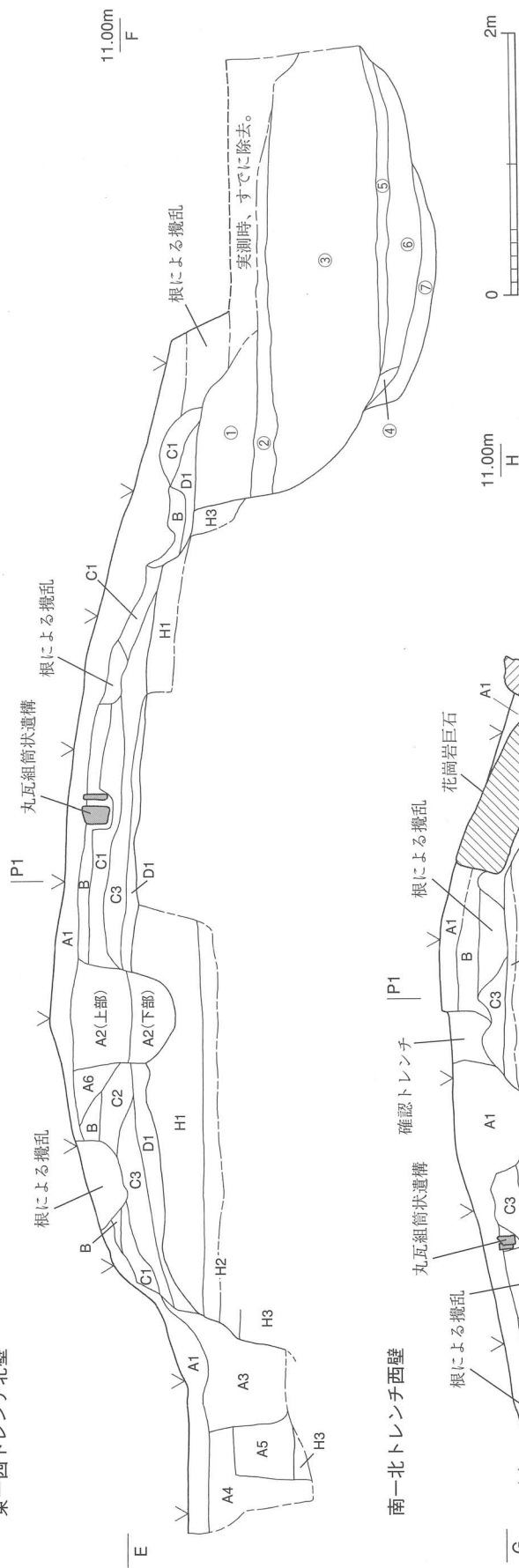
(1) 元塚

①土層（第16図、図版2）

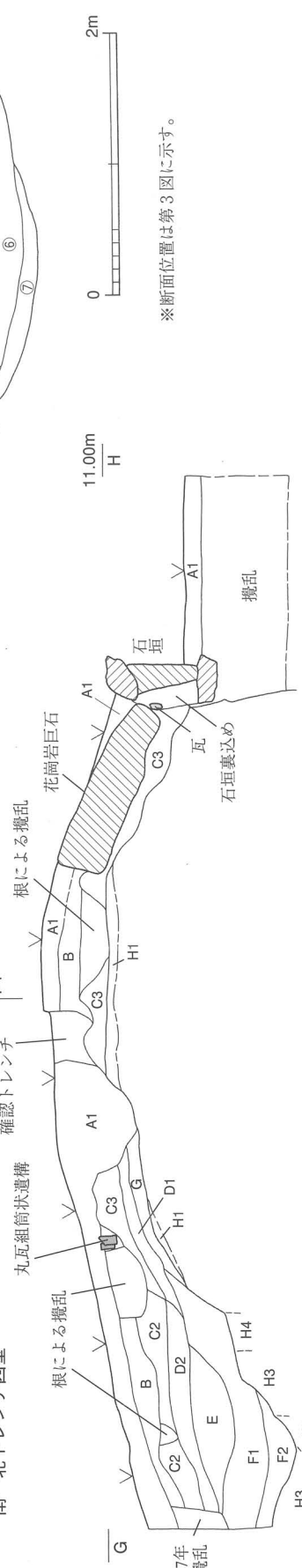
1977年の宅地造成時における緊急調査により、元塚を構成する土層の一部が確認されていたが、今回の本発掘調査に先立つ第1次確認調査および第2次確認調査において、元塚を南北軸・東西軸に合わせて「十」字形に断ち割るトレンチを設定し、土層の観察を行った（第3図）。その結果、大阪層群を基盤層とするⅠ期元塚の上に、自然堆積層や盛土の存在が確認され、一旦基盤層を削り出して形成された塚の上に何度か土が積み上げられていることがわかった。そして、本発掘調査によって具体的な元塚の変遷が明らかになった。ここでは、北トレンチ・南トレンチ（南－北トレンチ）の西壁と、東トレンチ・西トレンチ（東－西トレンチ）の北壁の土層断面図を示し（第16図）、各土層について説明する。

なお、元塚の土層については、現表土層および基盤層である大阪層群を除くと、東区とは直接対応する土層が認められないので、基本土層と区別するために、上から順にアルファベットの大文字で土層番号を付けている。色調や土質に若干の違いが観察されたものは、土層番号に数字を付して細分、表示している。土層名は、確認調査時に1977年の調査時の所見も参考にして名付けたものを本発掘調査でも踏襲し、その性格については、土層の広がりや出土遺物等から再検討を行った。その結果、元塚の土層は、Ⅳ期元塚の現表土を構成し、現代盛土・攪乱土を含むA層、Ⅲ期元塚の旧表土に相当するB層、Ⅲ期元塚構築時の盛土であるC層、Ⅱ期元塚の旧表土に相当するD層、Ⅱ期元塚構築時の盛土であるE層、Ⅰ期元塚の削り出し面に堆積したF層、Ⅰ期元塚の旧表土に相当すると考えられるG層、およびⅠ期

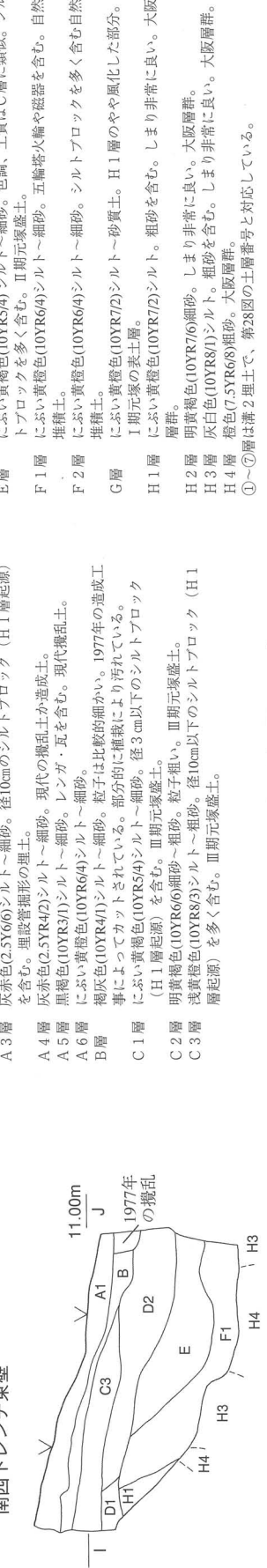
東一西トレンチ北壁



南一北トレンチ西壁



南西トレンチ東壁



- A1層 褐色(10YR4/4)シルト～細砂。現表土。芝生が植えられている。
A2層 上部：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土。C・D層起源の埋土。
下部：褐灰色(10YR4/1)砂質土。B層起源の埋土。1977年の緊急調査時のトレンチ埋土と考えられる。
A3層 灰赤色(2.5YR6/6)シルト～細砂。径10cmのシルトブロック (H1層起源)を含む。埋設管堀形の埋土。
A4層 灰赤色(2.5YR4/2)シルト～細砂。現代の攪乱土か造成土。
A5層 黒褐色(10YR3/1)シルト～細砂。レンガ・瓦を含む。現代攪乱土。
A6層 褐灰色(10YR4/1)シルト～細砂。粒子は比較的細かい。1977年の造成工事によってカットされている。部分的に植栽により汚れている。
C1層 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト～細砂。径3cm以下のシルトブロック (H1層起源)を含む。Ⅲ期元塚盛土。
C2層 明黄褐色(10YR6/6)細砂～粗砂。粒子粗い。Ⅲ期元塚盛土。
C3層 浅黄褐色(10YR8/3)シルト～粗砂。径10cm以下のシルトブロック (H1層起源)を多く含む。Ⅲ期元塚盛土。
- D1層 黄褐色(10YR5/6)シルト～細砂。径5cm以下のシルトブロック (H1層起源)を主体とし、やや汚れている。Ⅱ期元塚表土。
D2層 黄褐色(10YR5/6)シルト～細砂。色調はD1層に類似するがシルトブロックの含有は少なく、F1層に近い土質である。Ⅱ期元塚表土。
E層 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト～細砂。色調、土質はC層に類似。シルトブロックを多く含む。Ⅱ期元塚盛土。
F1層 にぶい黄褐色(10YR6/4)シルト～細砂。五輪塔火輪や磁器を含む。自然堆積土。
F2層 にぶい黄褐色(10YR6/4)シルト～細砂。シルトブロックを多く含む自然堆積土。
G層 にぶい黄褐色(10YR7/2)シルト～砂質土。H1層のやや風化した部分。Ⅰ期元塚の表土層。
H1層 にぶい黄褐色(10YR7/2)シルト。粗砂を含む。しまり非常に良い。大阪層群。
H2層 明黄褐色(10YR7/6)細砂。しまり非常に良い。大阪層群。
H3層 灰白色(10YR8/1)シルト。粗砂を含む。しまり非常に良い。大阪層群。
H4層 橙色(7.5YR6/8)粗砂。大阪層群。
①～⑦層は溝2埋土で、第28図の土層番号と対応している。

第16図 元塚 土層断面図 1/50

元塚の基盤層である H 層に区分されると解釈するに至った。以下、各土層の概略を述べる。

A 層は現代のもので、塚の南端部分では、1977年の擁壁工事による攪乱を埋めていることから、それ以後に盛られたものであることが判明した。西側の塚裾部も土管や鉄管の埋設により大きく攪乱を受けている。なお、A 2 層は1977年の緊急調査で設定したトレンチを埋めたものである。

B 層は近世後半から近代の遺物を多く含んでいた。当層は土壌化しており、Ⅲ期元塚の旧表土であったと考えられる。その時期は、近代（20世紀前半）から1977年までである。Ⅲ期元塚には B 層を掘り込んで樹立した丸瓦組筒状遺構が合わせて 9 基確認されている（第3・19図）。

C 層はⅢ期元塚を築成する盛土層で、基盤層起源のシルトブロックを含んでいる。このシルトブロックの含有の多い C 1・C 3 層と、南トレンチや西トレンチにおいて検出された含有の少ない C 2 層に細分できる。出土遺物は土師質土器、陶器、磁器、瓦小片等であり、18世紀後半から20世紀前半にかけてのものが中心となっている（第29図）。よって、明らかに近代（20世紀前半）以後の盛土であることがわかる。なお、元塚の北半部分は C 層直下が基盤層の H 1 層になっており、塚の南半部分で検出できる D～G 層に対応する層はなかった。その理由としては、Ⅰ期およびⅡ期元塚に関わる層が本来存在していなかったのではなく、Ⅲ期元塚を成形する時に削られてしまったものと解釈している。

D 層も人為的な盛土と考えられる層であるが、土壌化していることから旧表土の可能性を考え、Ⅱ期元塚の存在を想定するに至った。基盤層起源のシルトブロックを多く含み、塚頂付近の平坦部に分布している D 1 層と、シルトブロックの含有が少なく南斜面に分布する D 2 層に細分できる。D 層からは土師質土器、陶器、磁器、瓦、銅製品等が出土しており、その下限はくらわんか手の皿の存在から概ね18世紀後半と考えられる（第29図）。なお、塚東側には D 1 層の下に、基盤層起源のしまりの悪い明褐色～におい黄橙色砂礫土部分が検出され、溝 2 の埋土であることが確認されたが、これについては後述する。

E 層は、D 層の下に検出した基盤層起源のシルトブロックを多く含む層で、Ⅱ期元塚を築成する盛土と考えられる。ただし、その分布は塚の南裾部に限定される。E 層下面の様相から溝あるいは土坑状に掘りくぼめた部分を人為的に埋めているようにみえるので、E 層を盛り上げる前に、層界である F 層上面に何らかの窪みがあったことが推定できる。出土遺物は陶器や磁器・瓦の小片で、15世紀代の丹波焼も含まれている（第29図）。

F 層は、西トレンチ南壁で検出した当初は土坑の埋土と考えた層であるが（第24図）、塚の南側の基盤層直上に広範囲で認められること、粒子が均質であることから、人為的に埋められたものではなく自然堆積層であると考えに至った。南西トレンチにおいて観察したところ、北側から流入した様相が看取りでき、上部は土壌化が進んでいる。調査区南端では下面がほぼ水平であり、塚裾部に巡らされた周溝を埋めるように堆積している。基盤層起源のシルトブロックを含まない F 1 層と、基盤層起源のシルトブロックを含む F 2 層に分けられる。F 1 層が塚の傾斜面から塚の周溝の上部にかけて分布しているのに対し、F 2 層は周溝の下部に堆積している。出土遺物には、南西トレンチ拡張区出土の室町時代に遡る五輪塔火輪（第31図 8）や中世の備前焼片、17世紀代の丹波焼を含み、18世紀中頃を下限とする陶器・磁器・瓦がみられるので（第29図）、最終堆積時期は18世紀中頃と考えられる。

G 層は大阪層群が風化し、汚れた層である。分布範囲が D 1 層の下に限られていることから、Ⅱ期元塚の表土面に伴う風化と考えることもできるが、この層より南側が崖状に削られて、塚斜面の削り出しが行われたことが明確であるので、Ⅰ期元塚の表土層と判断した。本来南斜面にもⅠ期元塚の表土層は存在していたであろうが、かなり傾斜が急なので、雨によって表土層や基盤層の一部が流されてしまい、

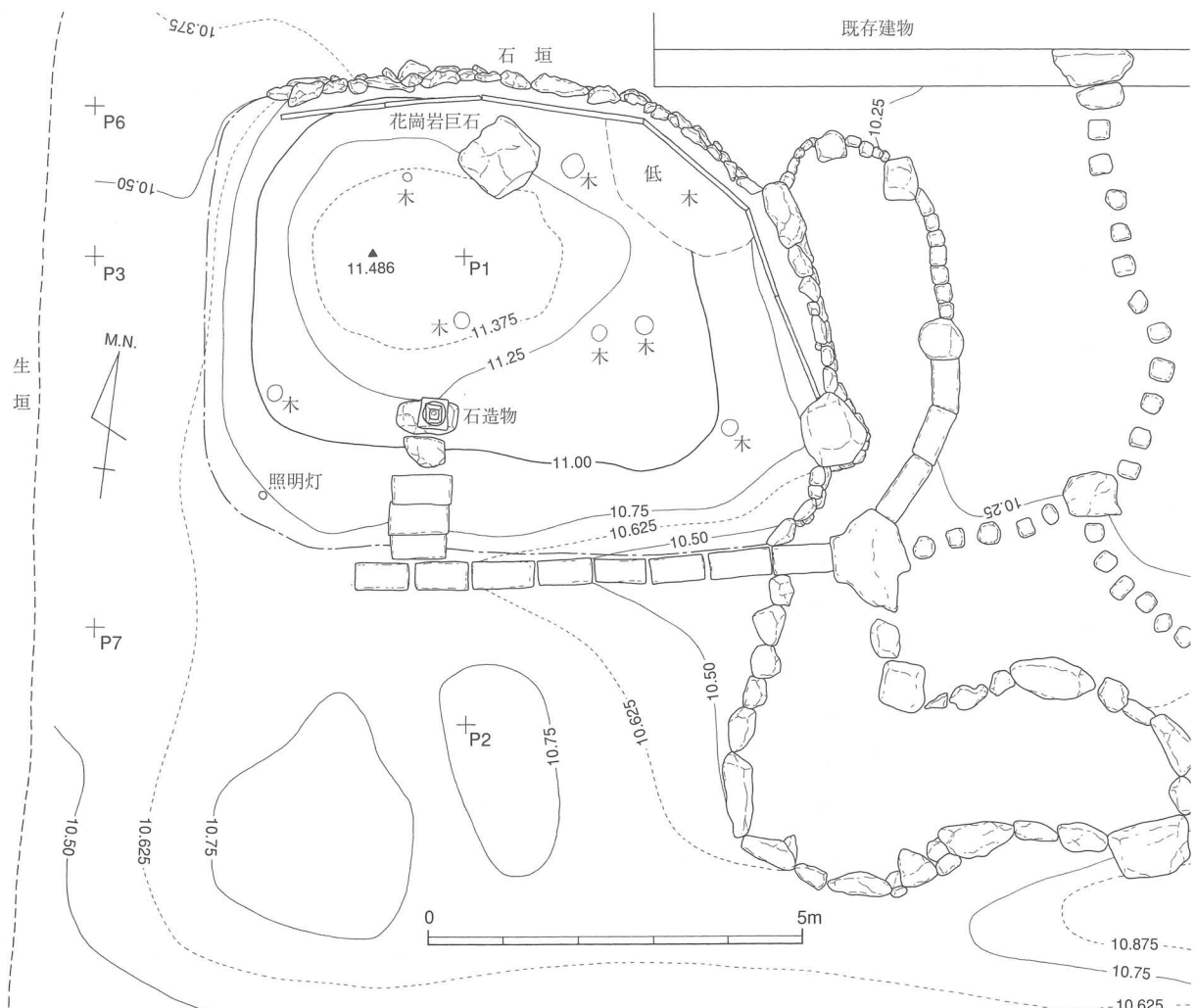
周溝底にシルトブロックを含むF2層が堆積したのであろう。

H層はⅠ期元塚の基盤層で、にぶい黄橙色シルト層や明黄褐色細砂層、灰白色シルト層、橙色粗砂層などで構成されている。色調や粒子の粗細で細分しているが、いずれも非常にしまりの良い、翠ヶ丘丘陵を構成する大阪層群である。この基盤層の上面は調査区の南側において急激に下降し、その南方で若干上昇することから、塚を削り出し、その南側裾部に周溝を構築したものと考えられる。(白谷)

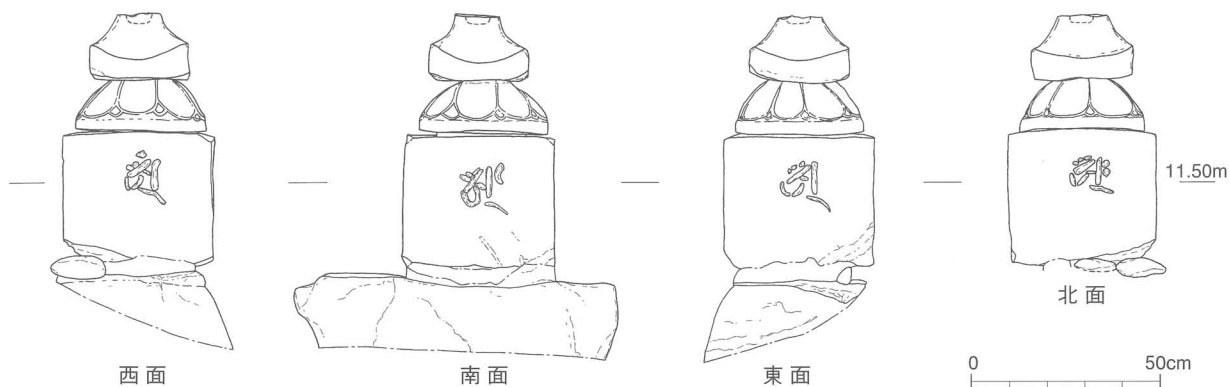
②Ⅳ期元塚(第17図、巻頭図版1、図版1)

発掘調査前の現状で、庭園西端に保存されていた元塚をⅣ期元塚とする。このⅣ期元塚は、Ⅲ期元塚の上に腐葉土を載せて芝を貼るとともに、サツキや紅葉、柘植などの樹木を植えて築山状にしたもので、1977年の造成工事以後に築かれたものである。塚上にはⅢ期元塚においてすでに生えていた松や榎の大樹〔細川1963〕もあった。平面形は隅円長方形で、その主軸は磁北より $7^{\circ}15'$ 西へ振っている。規模は基底部で東西約8.5m、南北約6.8mを測り、高さは約1mであった。塚の南側は比較的旧状を残しているのに対し、塚の北半分はⅢ期元塚やその下の基盤層まで掘り込んで石垣が設けられているために、Ⅲ期以前の元塚の形態は失われていた。また、塚の西側は、塚裾部に埋設管が集中しており攪乱を被っていたが、傾斜部分の残存状況は良好であった。

石造物 Ⅳ期元塚上には中世の石造物をアトランダムに組み合わせた石塔が設置されていた(第18図、



第17図 IV期元塚 平面図 1/100



第18図 IV期元塚上石造物 立面図 1/20

図版1)。1963年に細川道草氏が著した『芦屋郷土誌』〔細川1963〕には、元塚について「昭和二年十月、日綿実業株式会社紐育支店長山川氏が帰国してこの地を購入し、開拓して洋式の住宅を建築した。その当時はすでに土地区画整理が行われ、お墓は五輪塔一基しかなかった。山川氏は、この墓を庭園の西端に保存してお祀りした。今残っている五輪塔は完全なものではないが、礎石には四方に梵字が彫りこんであり相当古いものである。」と記されており、おそらくここに記された五輪塔がIV期元塚上の石造物に相当するのであろう。そうすると、石造物は昭和初期にこの地点に設置されたことになる。

この石造物については、これまでも何度か調査がなされているが、古くには1968年に報告され〔芦の芽グループ1968〕、さらに芦の芽グループ文化財パトロール委員会による1969～1971年の調査でより詳しく調べられ、紹介されている〔芦の芽グループ文化財パトロール委員会1973〕。前者ではNo79に石塔として、後者ではNo25に五輪塔残欠として分類・登載されている。昭和50年度には『新修芦屋市史』資料篇1の編集事業の進捗に伴って石造美術と考古学の両分野から現地踏査が行われ、専門調査員より分析が加えられた結果、石塔と報告されている〔勇・藤岡1976〕。また、昭和51年度には、昭和49年度より開始された市内民家・民俗調査の対象地区が土地区画整理事業の実施される打出春日町に絞られ、その石造物確認調査で再度の踏査をみており、その成果は1979年に紹介された〔田辺・森岡・位原1979〕。ここでは、「五輪塔の破損したもの2（地輪、四方に梵字あり。火輪、地輪と同一物ではないらしい）と反花座1」と記されている。前後するが、1977年に元塚の緊急調査が実施された折に、当該石造物についても調査が行われ、「五輪塔の地輪（基礎）＋反花座＋五輪塔の火輪（笠）という構造であって、完好品ではなく、個々の部位は別個体の可能性さえある。地輪の四面には梵字が刻まれ、実長縦33.5cm、横39.5cmを計測し、比率1.2で天文年間より新しい要素をもっている。しかし、笠などの作風から見て、全体としては室町時代（応永年間）の頃の造立にかかるものと推定される」と、調査所見が述べられている〔田岡・森岡1976、森岡1977〕。

当該石造物の最下段は五輪塔の地輪である（第31図13）。この地輪は、上面がほぼ水平で幅85cm、奥行き47.5cm以上、高さ20cm以上の台状の礫上に据えられ、コンクリートで固定されている。北側は地輪の下端の未整形部分に拳大から人頭大の花崗岩の円礫が詰められている。この地輪の上には、半球形の部材が載っており、反花座と考えられる（第31図17）。最上段には、五輪塔の火輪が載っている（第31図9）。

これら三つの部材はいずれも花崗岩製であるが、色調や鉱物粒の様相（カリ長石と正長石の量比、黒雲母片の形状）からみて、すべて別個体のものであることは明らかである。加えて、火輪と地輪の大きさを相対比較した場合、火輪に対して地輪の占める法量割合が大きすぎることから別々の個体であるこ

とがわかる。したがって、別個体の石造物の部材を、適当に積み上げたものといえる。(白谷)

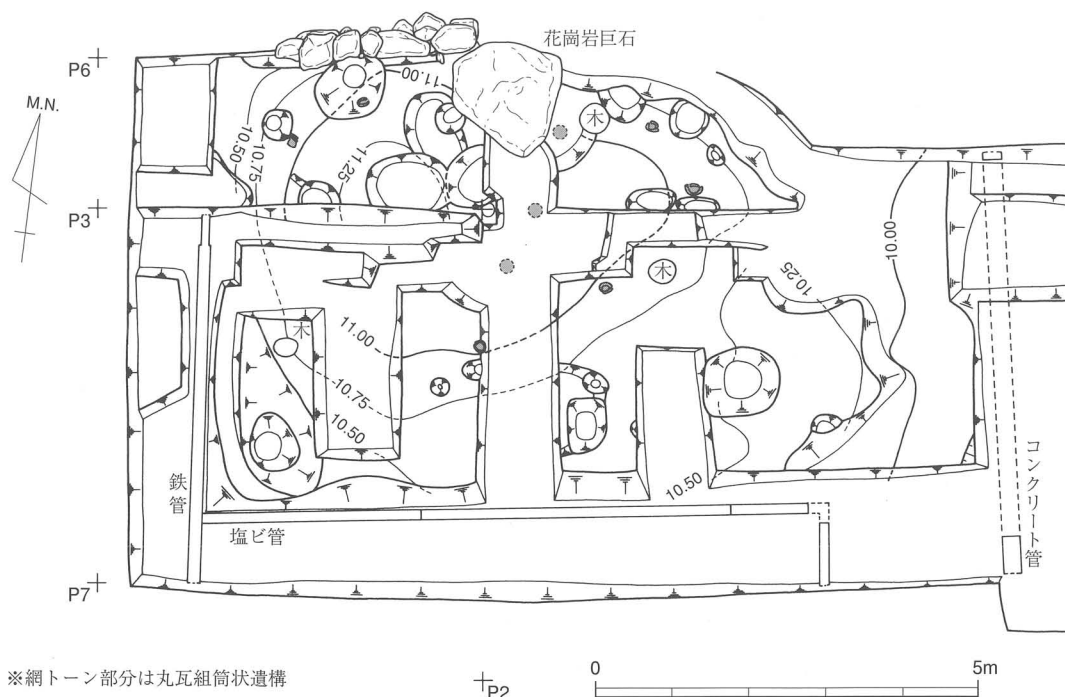
③Ⅲ期元塚（第19図、図版3）

Ⅳ期元塚を形成する A 層の下には、Ⅲ期元塚の旧表土である B 層があり、さらにその下には、Ⅲ期元塚構築時にⅡ期元塚の上に盛り上げた厚さ30cmほどの C 層がある。Ⅲ期元塚の平面形はⅣ期のものほど整っておらず、楕円形に近い。残存部分の規模は東西方向が8～9m、南北方向が5～6m程度で、当時の地表面からは1.2m程度の高さであったと推定される。『芦屋郷土誌』〔細川1963〕で記述された元塚は、まさに当該期のものである。

Ⅲ期元塚ではB層上面から掘り込みC層に達する土坑状掘形に丸瓦を直立させた、「丸瓦組筒状遺構」が9基確認された。これは2～4枚の丸瓦を円形や「D」字形に立て並べたもので、筒状部の内側は空洞である。ここで用いられていた丸瓦はいずれもいぶし瓦で、凹面に粗い鑄をもつが、凸面は全体に磨滅しており、使用後の転用である可能性が高い。玉縁を下にして樹立していたため多くは玉縁が残っているが、逆方向の端部はその多くが欠損している。完存しているものの長さは、21.5cm～23cmとばらつきがあり、一つの丸瓦組筒状遺構に、全長23cmの瓦と21.5cmの瓦が混在しているなど、同一遺構でも同規格のものをを用いているわけではない。当遺構と同様の施設が猪名川町立静思館（旧富田家住宅）の庭でみられ、同町教育委員会仁部壽夫氏より植栽の寒肥のためのものであると御教示いただいた。

塚上の北寄りの位置に置かれた花崗岩巨石の下には基盤層との間にC層が存在しており、明らかにⅢ期元塚構築時以後に設置されたことがわかる。加えて、C層と基盤層の層界は木の根による攪乱が著しいため、不明な点も多いが、D～F層に対応する土層は残存していないようである。

C層から出土した遺物は土師質土器、陶器、磁器、瓦小片等で、その年代は18世紀後半から近代（20世紀）にかけてのものが中心となっている（第29図）。また、B層は近世後半から近代初頭の遺物を多く含んでおり、塚南東部において、Ⅱ期元塚の表土層直上に広がる炭化物層の中からは近代（20世紀）



第19回 川期元塚 平面図 1/100

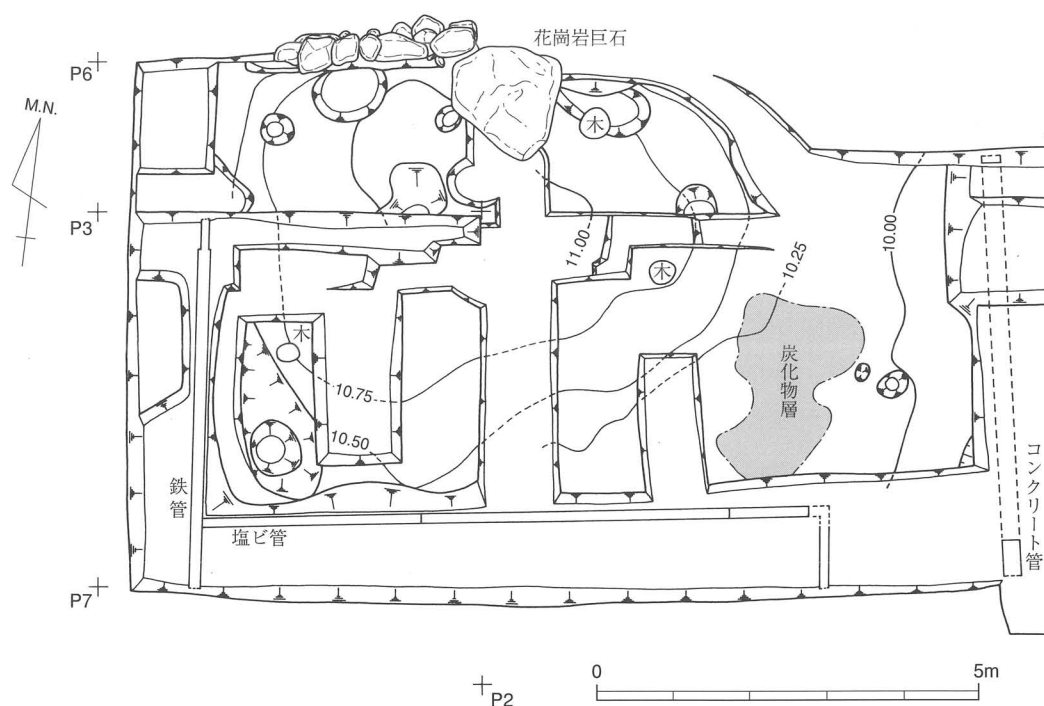
の磁器が出土しているので、Ⅲ期元塚の築造が20世紀に下ることは明らかである。あるいは、『芦屋郷土誌』〔細川1963〕に記された、「昭和二年十月、日綿実業株式会社紐育支店長山川氏が帰国してこの地を購入し、開拓して洋式の住宅を建築した」とされる時点が、Ⅲ期元塚を築造した契機にあたる可能性が高い。（白谷）

④Ⅱ期元塚（第20図、図版3）

Ⅲ期元塚の下には、Ⅰ期元塚の旧表土に相当すると考えられるG層に至るまでに、盛土であるD・E層と自然堆積層であるF層が検出されている。D層とE層は基盤層起源のシルトブロックを含む土層であり、一連の作業によって盛り上げられたと考えられる。その上のC層も合わせて、C・D・E層が一連の作業によって盛り上げられた可能性もあるが、D層が土壌化していることから、D層上面が地表面として機能した後にC層が盛られたと判断し、Ⅱ期元塚を想定した。Ⅱ期元塚の平面形は楕円形で、残存部分の規模は東西方向が8～9m程度、南北方向が5～6m程度で、当時の地表面からは0.9m程度の高さであったと推定される。

ところで、塚の北半部分はC層のすぐ下が基盤層になっており、Ⅱ期およびその下に位置したと考えられるⅠ期元塚の表土層は、Ⅲ期元塚の形成時に削平されたのか、残っていない。そのためⅡ期およびⅠ期元塚の北側地表面について確実なことはわからない。ただし、Ⅱ期元塚は、Ⅲ期元塚よりも北側に広がる平坦面を有していた可能性がある。というのは、塚の東部ではD層の下に溝2を埋めた盛土層が存在しており、この溝2は現在残っている塚の北東部に回り込む様相が看取できる。しかも、この溝2は調査区より北側へ延びていることが確実なので、溝2を埋めた盛土層の上に構築されたⅡ期元塚は、Ⅲ期元塚より大きく、より北方に広がっていた可能性が考えられるのである。

Ⅱ期元塚の盛土に含まれている遺物は、土師質土器、陶器、磁器、瓦、銅製品等で、室町時代の備前焼や丹波焼の破片もあるが、最も新しいものは18世紀中頃～後半のくらわんか手の皿である（第29図）。



第20図 Ⅱ期元塚 平面図 1/100

よって、Ⅱ期元塚の築造年代は18世紀中頃～後半と考えられる。この年代は、より下位に位置するF層や溝2埋土出土の遺物の年代とも齟齬をきたさない。また、塚南東部ではD層の直上で近代（20世紀前半）の磁器を含む炭化物層がみられたので、Ⅱ期元塚は最終的には20世紀前半まで機能していたようである。

なお、Ⅱ期元塚上には平坦面、傾斜面を問わず、明確な遺構は確認できなかった。しかし、D層中から出土した軒丸瓦や銅製品の存在や、Ⅳ期まで石造物が伝世していたことから、Ⅱ期元塚上に石造物の樹立や小規模な祠の設営を考えるのも強ち無理ではなかろう。（白谷）

⑤Ⅰ期元塚（第21・22図、巻頭図版1・2、図版4・5）

Ⅱ期元塚の下層からは、盛土や自然堆積層に覆われたⅠ期元塚が検出された。元塚が築造された地点は、江尻川の開析谷の東側に形成された段丘の突端に位置しており、塚の西側と南側は比高差5mを超える段丘崖であったと考えられる（第33図）。一方、北東側は比較的平坦な段丘面に相当する。

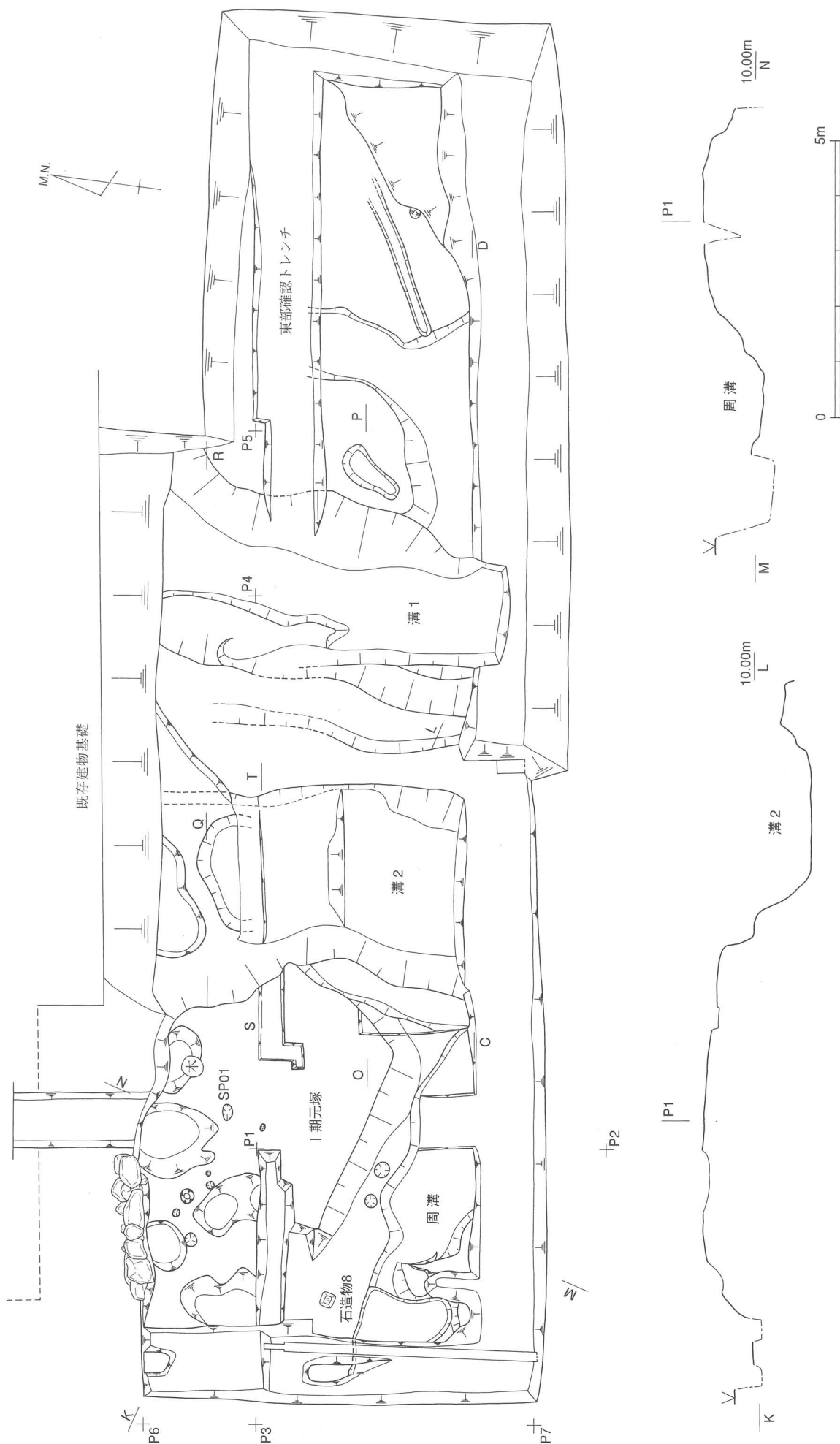
このような立地条件の下で、Ⅰ期元塚は基盤層を削り出すことにより築造されている。塚の南部は南へ傾斜する自然地形を利用し、それを削って高さ70cm程度の傾斜面を形成しており、斜面の下端（塚裾部分）には幅50～150cmの周溝が設けられている。調査区南西部では周溝の南肩が確認されているので、この周溝が単なる雛壇状の削り出しでないことがわかる。しかし、周溝の南肩より南側は1977年の造成工事の際に攪乱を被り、すでに旧状を失っているため、元塚南方の旧地形について、これ以上はわからない。

Ⅰ期元塚の形態は、長方形あるいは方形を呈すると推定される。Ⅰ期元塚の主軸は磁北より16°東へ振っており、Ⅳ期元塚の主軸よりかなり東へ振っている。規模は基底部で東西7.5m、南北5m程度で、塚頂部に東西4m、南北3m程度の平坦面が認められ、南側の周溝底との比高差は約1.1mである。Ⅰ期元塚では南側や西側は比較的旧状を留めていると考えられるが、塚の東側は南東端を除くと溝2によって切り崩されている。溝2はさらに塚の北側にも回り込んでおり、この部分に本来周溝等の施設があったかどうかはわからない。その上、既存建物によって調査区より北側は攪乱を被っており、本来塚の北側がどのようなものであったかは不明である。ちなみに、Ⅰ期元塚の塚頂から溝2の底までの比高差は約2mあり、南側の周溝部分で計測する比高差より90cm大きい。

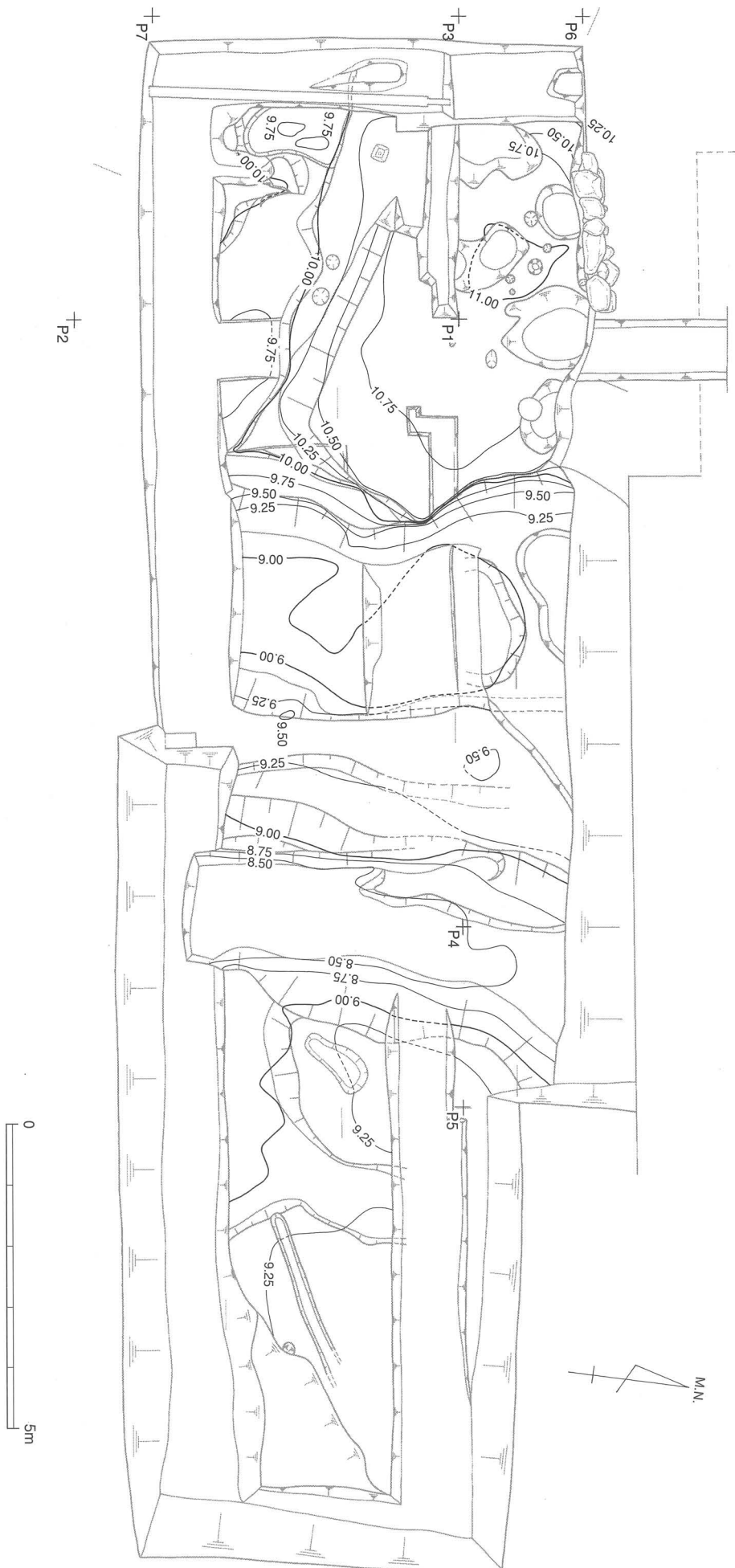
塚頂部にはピットが1基（SP01）検出されている（第21図）。SP01は径25cm、深さ10cmで、埋土は灰白色（10YR8/1～2.5Y7/1）シルト～粘土である（第23図）。この埋土は白色粗砂や花崗岩風化礫を含む基盤層起源の土でやや汚れており、粉状になった土師質土器細片を含んでいた。おそらく、塚の基盤層を掘り返して同じ土で埋め戻したものと考えられる。このピットの性格について、埋葬施設や火葬痕跡でないのは明らかであるが、その具体的な性格は不明である。

Ⅰ期元塚の南裾で検出された周溝は、調査区の西端部分や南端部分は攪乱を被っており、すでに破壊されていたが、それでも長さ6.7mにわたって確認できた。幅は約120～150cm、深さは約40cmを測る。断面形は浅い逆台形で、底面は平坦である。埋土は上部が元塚の南斜面を埋めているF1層で、溝底にはF1層よりもシルトブロックを多く含むF2層がみられた。南肩については約2m確認できたのみであったが、北肩が直線的であるのに対し、この南肩は調査区の南西端付近で塚部への突出があり、溝幅が僅か50cmと狭くなっている。この狭窄部分には簡便な橋等が設けられ、塚への通路となっていたのかもしれない。

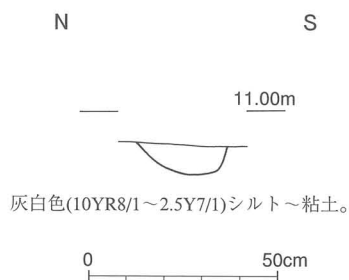
第2次確認調査で五輪塔火輪（第31図8）が出土した地点はⅠ期元塚の南斜面の西端付近で（第3・



第21図 I期元塚および東区平面図・I期元塚断面図 1/100



第22図 Ⅰ期元塚および東区 等高線図 1/100



第23図 I期元塚 SP01 土層断面図 1/20

21図)、基盤層上面の傾斜部分よりやや浮いた状態で出土した(第2・24図)。火輪はほとんどF1層に埋もれ、正位置で出土しており、最上部がわずかにF1層の上に出ていた。この火輪は、塚上に存在する石造物の最上部に載っている五輪塔の火輪と石材や規模が似ているが、四隅反りの形態や扁平率が異なる。下面がより平坦で反り上がりが弱く扁平であることから、IV期元塚上の石造物を構成する火輪よりも古いと考えられる。

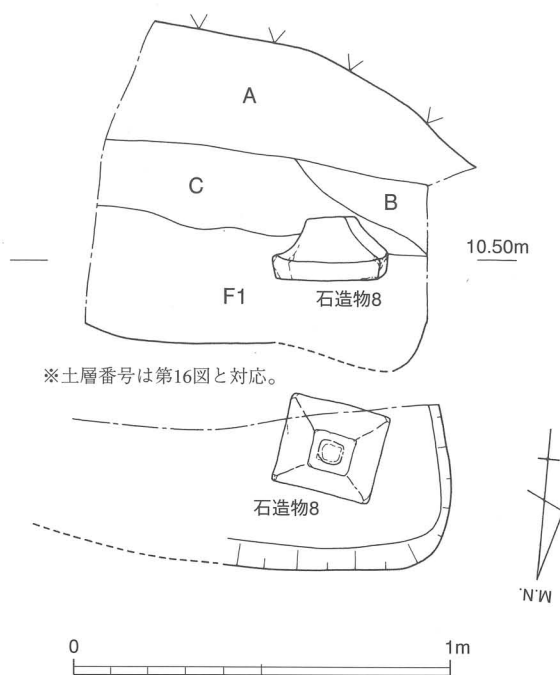
この石造物のほかにF1層から出土した遺物は、土師質土器や陶器、磁器の破片で、丹波焼や備前焼も含まれており、その上限は15世紀代である。一方、下限はくらわんか碗の様相から18世紀中頃～後半まで下る(第29図)。よって、I期元塚が築かれた年代は室町時代(14世紀後半～15世紀)まで遡る可能性があるといえる。さらに、IV期元塚上に設置されていた石造物や周溝から出土した五輪塔火輪、さらには溝1から出土した数多くの石造物の存在から、16世紀代までは、塚上あるいは溝1以東に、五輪塔を主体として石仏や一石五輪塔を含むいくつかの石造物が造立されていたと考えることができる。(白谷)

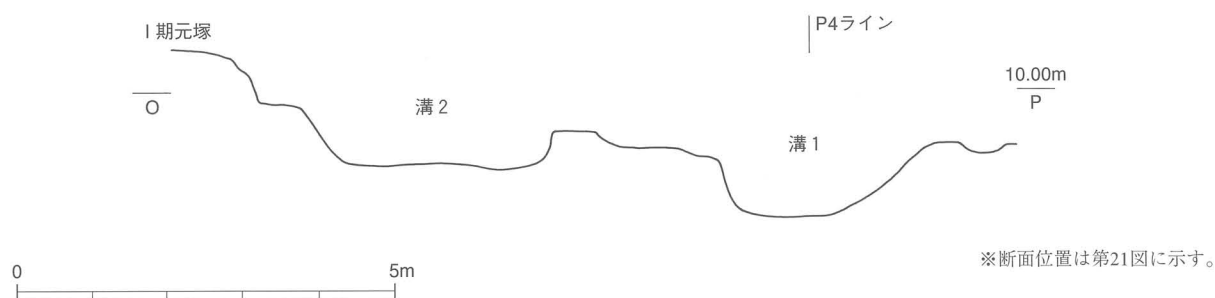
⑥元塚の性格

元塚の性格については、埋葬施設が確認されなかったことから、墳墓とみなすことは困難である。加えて、中世墓を代表する形態は貼り石や列石を伴う石組墓であり〔狭川2002〕、芦屋市内においても、城山南麓遺跡A地点の発掘調査において方形の石組墓(配石墓)が確認されている〔森岡1985・1986a〕のに対し、元塚では塚の盛土はもとより、溝1・2の埋土からもそのような性格を推測させる石材は検出されておらず、この点からも墳墓とは考え難い。そういう理由から、元塚は埋葬とは無関係な土盛りや信仰的な物証、地上標識などとして機能するいわゆる「塚」〔坂詰1987〕であると考えられる。

どのような性格の塚であったのかについては推測の域を出ないが、元塚周辺の旧字名が寺開地であり(第11図)、大正時代には、当該敷地に石造物が数多く分布していたという証言(春日町在住の森 大作氏より御教示していただいた。)などから推察すると、例えば詣り墓を含めた墓所の一角ないしその近辺にあった塚ということが考えられる。また、五輪塔をはじめとする石造物の性格から、供養塔として造立された石塔群のそばに元塚があったのかもしれない。それとは別に、石造物とは切り離して、西国街道に面した段丘崖の縁辺に築造された標遺構〔唐澤2003〕であったという解釈も成り立つであろう。

(竹村・白谷)

第24図 I期元塚南西部五輪塔火輪検出状況
平面図・土層断面図 1/20



第25図 溝1・2 断面図 1/100

(2) 溝

東区では2条の溝が検出され、東側のものを溝1、西側のものを溝2と名付けた（第21・22・25図、巻頭図版2、図版4・6）。

①溝1（第26・27図、巻頭図版2、図版6）

形態・規模 I期元塚の東裾から東へ約5mを西肩として南北方向に走る溝で、北部では北東方向に曲っている。その幅は2.9～3.3m、深さは90cm前後である。溝の北側は既存建物の基礎によって大きく損壊を受けており、南側も造成時に攪乱されていたため、長さ6.3mしか残存していなかった。当溝の断面形は逆台形で、緩い傾斜から傾斜変換点をもって急角度で落ち込み、底は比較的平らである（第25～27図）。検出範囲での底面レベルは、北側でT.P.8.625m、南側でT.P.8.313mとなっており、比高差31.2cmをもって南方へ低くなっている（第27図）。

土層 土層番号は、本章第2節の基本土層で用いたものと対応している。当溝は基盤層である4層上面から掘り込まれており、3b層に覆われている。

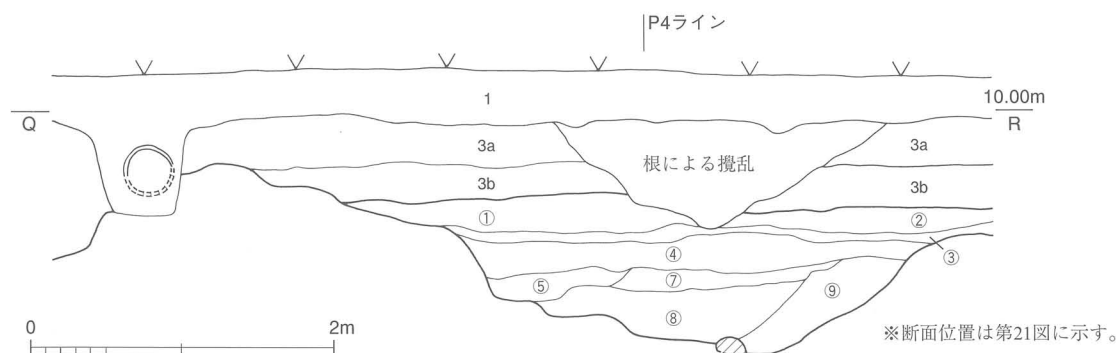
溝の埋土は①～⑨層に細分できたが、さらに溝の形成および埋没過程を推定して、最上層・上層・中層・下層の4層に大別した（第26図）。

最上層（①・②層）は、溝1の埋没が進行した最終段階に自然堆積したものと考えられる。①層が粘性が強いシルト質であるのに対し、②層はしまりの良い粗砂混じり砂質土である。両層ともにやや土壌化しており、旧表土であったと推測される。最上層からは五輪塔空風輪・一石五輪塔片（第31図3・15）が出土している。遺物では土師質もしくは瓦質土器の破片（第30図46）が出土しているが、詳細な時期はわからない。

上層（③層）は基盤層起源の灰白色シルトブロックを含む砂質土であり、溝1を人為的に埋めた土であると考えられる。遺物では、丹波焼甕と平瓦の破片が出土している（第30図47・48）。丹波焼甕は、14～15世紀のものと考えられる。

中層（④～⑥層）について、④層は溝1全体に広がっているが、⑤層は溝1の西斜面際の深い部分にのみ堆積しており、⑥層は南部攪乱北壁の土層断面にみられた（第15図）。これらの層は、溝1がある程度埋没した後、再掘削された部分に堆積したものと考えられる。⑤層は粘性があり、幾分土壌化しているので、再掘削された溝1には滞水状態の時期があったと推測される。⑥層は④層に似ているが、粗砂を多く含んでいる。④層からは空風輪2点（第31図1・2）、⑤層からは一石五輪塔片（第31図14）が出土している。

下層である⑦～⑨層について、⑦・⑧層は縞状に鉄分が沈着しており、緩やかな水流によって徐々に



1・3a・3b層は、第15図の土層番号に対応。

- ①層 におい黄褐色(10YR5/4)～におい黄褐色(10YR6/4)粘性シルト。3b層に似るが粘性が強くシルト質。
- ②層 明黄褐色(10YR6/6)粗砂混じり砂質土。しまりは良い。
- ③層 灰白色(10YR8/1)シルトブロック＋黄褐色(10YR5/6)砂質土。基盤層起源の灰白色シルトブロックを含む。人為的な埋土。
- ④層 におい黄褐色(10YR5/4)～灰黄色(2.5Y6/2)中砂質土～粗砂質土。
- ⑤層 におい黄褐色(10YR6/4)～黄褐色(2.5Y5/3)粘性粗砂質土。粘性あり。土壌化している。
- ⑥層 におい黄褐色(10YR5/4)～灰黄色(2.5Y6/2)粗砂質土。④層に似るが、より粗砂を多く含む。第15図 東区南攪乱北壁に図示。
- ⑦層 褐灰色(10YR6/1)～灰黄色(2.5Y6/2)粗砂混じり砂質土。ラミナがみられ、明褐色(7.5YR5/8)の鉄分沈着あり。やや土壌化している。
- ⑧層 褐灰色(10YR6/1)～灰黄色(2.5Y6/2)粗砂混じり砂質土。ラミナがみられ、明褐色(7.5YR5/8)の鉄分沈着あり。
- ⑨層 におい黄褐色(10YR7/4～10YR7/3)粗砂質土。粘土ブロックを含む。溝東肩から崩れ落ちた堆積土と考えられる。

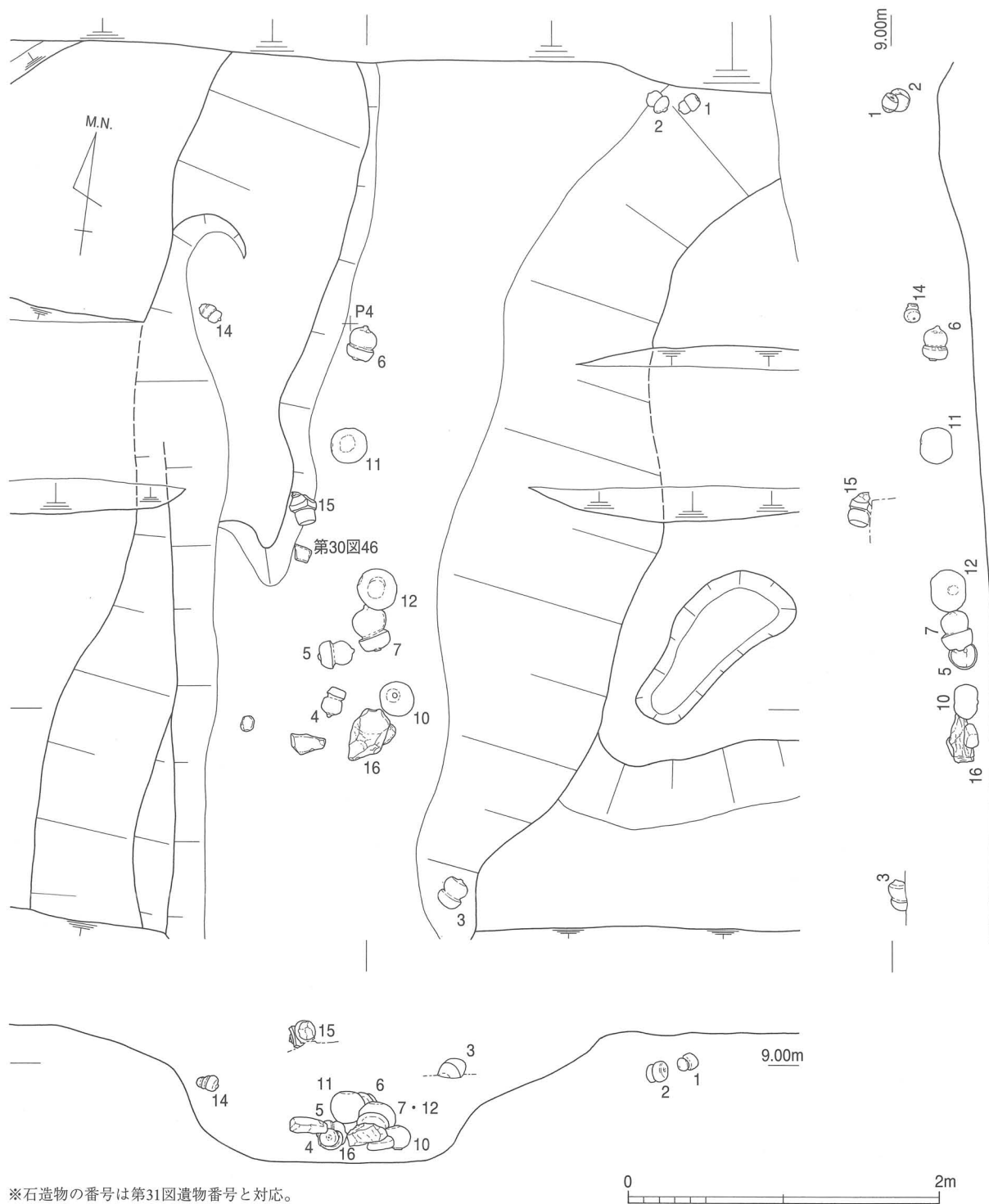
第26図 溝1 土層断面図 1/50

堆積が進行したものと考えられる。⑨層には粘土ブロックが含まれており、溝の東肩から崩れ落ちたものと推測される。これらの土層のうち、⑧層からは数多くの石造物（第31図4～7・10～12・16）が出土した。その他の遺物では、下層（⑦～⑨層）から備前焼と考えられる陶器片が出土しており（第30図49～51）、15～16世紀頃のものとして推定される。⑦層もしくは⑧層からは土師質土器が2片出土しているが、細片のため時期はわからない。また、気にかかる遺物として、骨の細片が出土している。この骨片について、人骨かどうかは鑑定できていない。⑧層からは備前焼片が出土しており、15～16世紀のものと考えられる。

石造物検出状況 溝1からは石造物が数多く出土した（第27図、巻頭図版2、図版6）。ここで、先述した各石造物の出土層位をまとめると、最上層からは五輪塔空風輪1点・一石五輪塔片1点（第31図3・15）、中層では⑤層から一石五輪塔片1点（第31図14）、下層では⑧層から五輪塔空風輪4点（第31図4～7）、五輪塔水輪3点（第31図10～12）、石仏1点（第31図16）が出土している。これらをみると石造物の出土層序は、その製作年代と対応していないと言える。

出土位置について、⑧層出土の石造物に絞ってしてみると、南部の空風輪3点・水輪2点・石仏1点（第27図4・5・7・10・12・16）にまとまりが認められる。これらは溝の東半に偏っている傾向が指摘できる。このことから、これらの石造物は溝1の東側から溝内に入ったものと推測される。

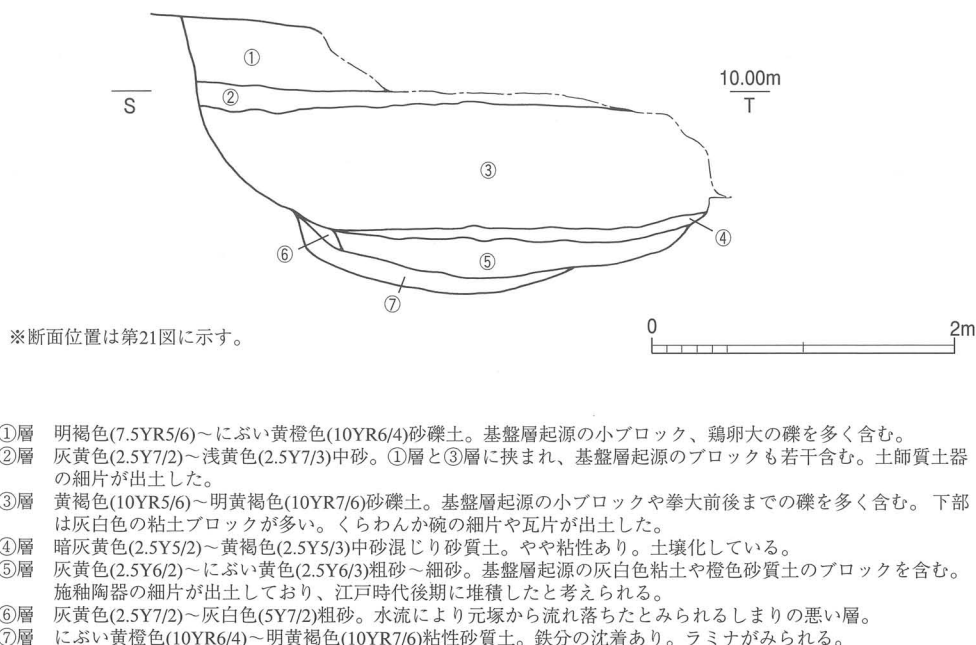
出土した石造物の種類をみると、五輪塔の部材が多く出土しているにもかかわらず、いずれの層位からも火輪・地輪は認められなかった。また、一石五輪塔についても地輪をはじめとする角ばった部分は欠損していた。これらのことから、火輪・地輪等の部材は、転用を目的に抜き取られ、不要な部材として捨てられた空風輪・水輪などが、溝1に入ったものと推測される。石造物が溝1に入る要因が、人為的に投入されたものか、自然に転落したものかは実証できないが、⑧層出土のものに限れば、おそらく



第27図 溝1 石造物検出状況 平面図・立面図 1/40

人為的に一括投棄されたものであろう。

形成・埋没の過程とその時期 先述した溝1の埋土から、当溝の形成から埋没に至る堆積過程を推測すると、下層（⑦・⑧・⑨層）が当溝掘削後の自然堆積層、中層（④・⑤・⑥層）が溝を再掘削した後の自然堆積層、上層（③層）が溝を人為的に埋めた堆積層、最上層（①・②層）が溝痕跡の窪地に自然に堆積した土層と考えられる。



第28図 溝2 土層断面図 1/50

次に時期について検討すると、当溝が掘削された時期は、下層（⑧層）から出土した石造物の製作年代が14世紀後半～16世紀を主体とし、同層から出土した土器類も15～16世紀頃のものと考えられることから、14世紀後半～15世紀に掘削されたと推定する。

一方、当溝が埋没した時期は、出土遺物が極めて少なく確証を得ないが、17世紀以降の遺物がまったく確認されていないことから、16世紀中であると推察する。（竹村）

②溝2（第28図、図版6）

形態・規模 溝2は、Ⅰ期元塚の東部において検出された。層序からは、Ⅱ期元塚に先行することが確認できる。当初は当溝の埋土である①層がそれほど汚れていなかったことから大阪層群か、もしくは古い時期の大阪層群の再堆積層と考え、基盤層とみなしていた。しかし、他の基盤層と比べると極端にしまりが悪く礫の含有が多いことから、東部確認トレンチ部分を深掘して土層の検討を行ったところ、少量ながらも江戸時代の遺物を含んでいることがわかり、遺溝であることが判明した。

当溝はⅠ期元塚の東裾を切るように南北方向に掘削されている。溝1と同じく北側と南側が攪乱されている上に、東肩もコンクリート管理設によって壊されているため、全容はわからない。その残存幅は3～3.8mを測り、残存長は5.2mである。断面形は逆台形を呈し、深さは元塚側の西肩では約1.6m、東肩では約0.5mとなっている（第21・25図）。ただし、当溝は3a層上面から掘り込まれていると考えられ、東肩での深さは1m程度であったと推定される（第15図）。溝の底面では、径3m、深さ45cm程度の円形を呈する皿状の落ち込みが検出された。検出範囲での底面レベルは、北側でT.P.8.825m、南側でT.P.8.994mとなっており、地形に反して南側が約17cm高くなっている。次に述べる埋土の堆積状況からは、水が常に流れていたわけではないことがうかがえ、遺構としては溝としているものの、切り通してつくられた道などの可能性も十分考えられる。

土層 当溝に関連する土層は①～⑦層に分けられたが、さらに溝の形成および埋没過程から上層・下

層の2層に大別した(第28図)。

上層(①～③層)では、①層と③層が基盤層起源のブロックや礫を多く含んでいることから、人為的な埋土であることがわかる。両層は色調が多少異なるが、土質は極めて似ている。①層と③層の間には、②層が15cm程度の厚さで堆積している。これら①～③層の堆積過程の解釈としては次の2説が考えられる。その一つは②層を旧表土として考え、溝を埋める行為が①層と③層に対応する2時期あったというものである。もう一つは、溝を埋める一連の作業工程が①～③層の3単位あったという解釈である。なお、③層の下部には灰白色の粘土ブロックが多く認められるが、これについてはⅠ期元塚の基盤層(H層)が崩れ落ちたものである可能性も考えられる。上層の遺物では、③層から江戸時代中期(18世紀)に比定されるくわんか碗の細片が出土している。

下層(④～⑦層)は、溝底面で検出された落ち込みの埋土であり、分布範囲は限られている。④層はやや粘性がある砂質土で、土壌化していることから表土であったと考えられる。⑤層は粗砂～細砂で、基盤層起源の灰白色粘土や橙色砂質土のブロックを含んでいる。⑥層は西部にのみ分布する粗砂で、しまりが悪く、元塚側から流れ落ちてきたものと推測される。当層からは、江戸時代中期以後(18世紀以降)の施釉陶器の細片が出土している。最下層の⑦層は粘性砂質土で、鉄分の沈着がありラミナがみられる。

基盤層については、溝の東肩と西肩で様相が異なる。これは大阪層群中の違いと言えるが、西側の基盤層がⅠ期元塚の基盤層(H3層)であり、しまりの非常に良いシルトであるのに対して、東側の基盤層はラミナのみられる砂層であった。下層の遺物では、⑤～⑦層から江戸時代中期(18世紀)の陶器・磁器が出土している(第30図52～54)。

形成・埋没の過程とその時期 先述した埋土の堆積状況から溝2の形成から埋没に至る過程を推測すると、溝2はⅠ期元塚の築成後、Ⅱ期元塚が築造されるまでに、塚の東端を削って形成されている。また、溝の底面には落ち込みが掘削されている。溝形成後に、落ち込み内に④～⑦層が堆積するが、④層は土壌化していることから、表土であったと推測される。⑤～⑦層に江戸時代中期(18世紀)の遺物が包含されていたことから、落ち込みは当該時期に埋没したと考えられる。その後、溝2は①～③層で人為的に埋められるが、これらの層が2時期にわたる埋土なのか、同時に行われた作業の単位なのかはわからない。さらに、これらの層がⅡ期元塚を築造するために溝2を埋めたものか、それとは別の目的で埋められたものなのかは明らかにできない。ただし、最上層である①層が堆積した後に、Ⅱ期元塚が築造されていることは確かである。(竹村)

③溝1・溝2と元塚の関係

溝1と溝2の関係 溝1と溝2の関係については、先述したとおり、溝1が16世紀中には埋没しており、一方の溝2は18世紀に形成されることから、両者が同時期に存在していないことは確実である。

溝1と元塚の関係 溝1が機能していた14世紀後半～16世紀に対応するのは、Ⅰ期元塚である。Ⅰ期元塚は18世紀に溝2によって東部が切り崩されるので、Ⅰ期元塚と溝1の距離は現状で確認できる距離より、もう少し短かったと考えられる。両者の性格について、例えば溝1がⅠ期元塚の東側周溝など、元塚に伴う施設である可能性は、位置や規模から考え難い。ただし、両者からは同時期の石造物が出土していることから、有機的に関連している蓋然性は高い。

溝2と元塚の関係 層序からみると、溝2はⅠ期元塚の東部を切り崩し、埋没後にⅡ期元塚がその上に築造されている。溝2の形成と埋没の状況を見ると、Ⅰ・Ⅱ期元塚に伴う施設ではないと考えられる。ただし、元塚の東側を通ることに何らかの意味があったのかもしれない。(竹村・白谷)

第4節 遺物

今回出土した遺物は、須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦・鉄製品・銅製品・石造物などで、コンテナ26箱を数える。これらは中世～近現代のもので、中世よりも古いものは含まれておらず、調査地周辺の土地利用について、遺物からうかがい知ることができるのは、Ⅰ期元塚築造以降ということになる。以下、陶磁器や瓦については元塚出土のものと、溝および東区の包含層出土のものに分けて記述し、石造物については一括して述べる。

(1) 元塚出土遺物（第29図1～39、図版7）

元塚からは、土師質土器・陶器・磁器・瓦・金属製品等が出土した。図示した遺物は、1～8がA層、9・10がB層、11がC層、12～18がD層直上炭化物層、19～25がD層、26～29がE層、30～39がF層から出土したものである。なお、確認調査の遺物も、出土層位を検討して併せて掲載している。

A層から出土した遺物は、土師質土器・陶器・磁器・瓦・鉄製品で、現代に下る遺物が含まれている。その中から、近世～近代の特徴的な遺物を図示した。1は土師質土器灯明皿脚底部である。柿釉が施された江戸時代後期のものである。2は肥前系の白磁紅皿で、江戸時代中期以後の資料になる。3～7は染付磁器で、3が筒型湯飲み碗、4・7が丸碗、5が小皿、6が湯飲み碗である。これらの帰属年代は江戸時代後期～幕末である。8は細かい播目が内面全体に施された近代の備前焼播鉢である。

B層から出土した遺物は、土師質土器・陶器・磁器・瓦・鉄製品・銅銭等で、近世～近現代の資料である。図示した9は暗褐色と白色の釉の掛け分けのみられる近代以後の萩焼湯飲み茶碗である。一方、10は「寶」がいわゆる「ハ貝寶」なので、1668年以後に铸造された新寛永である。

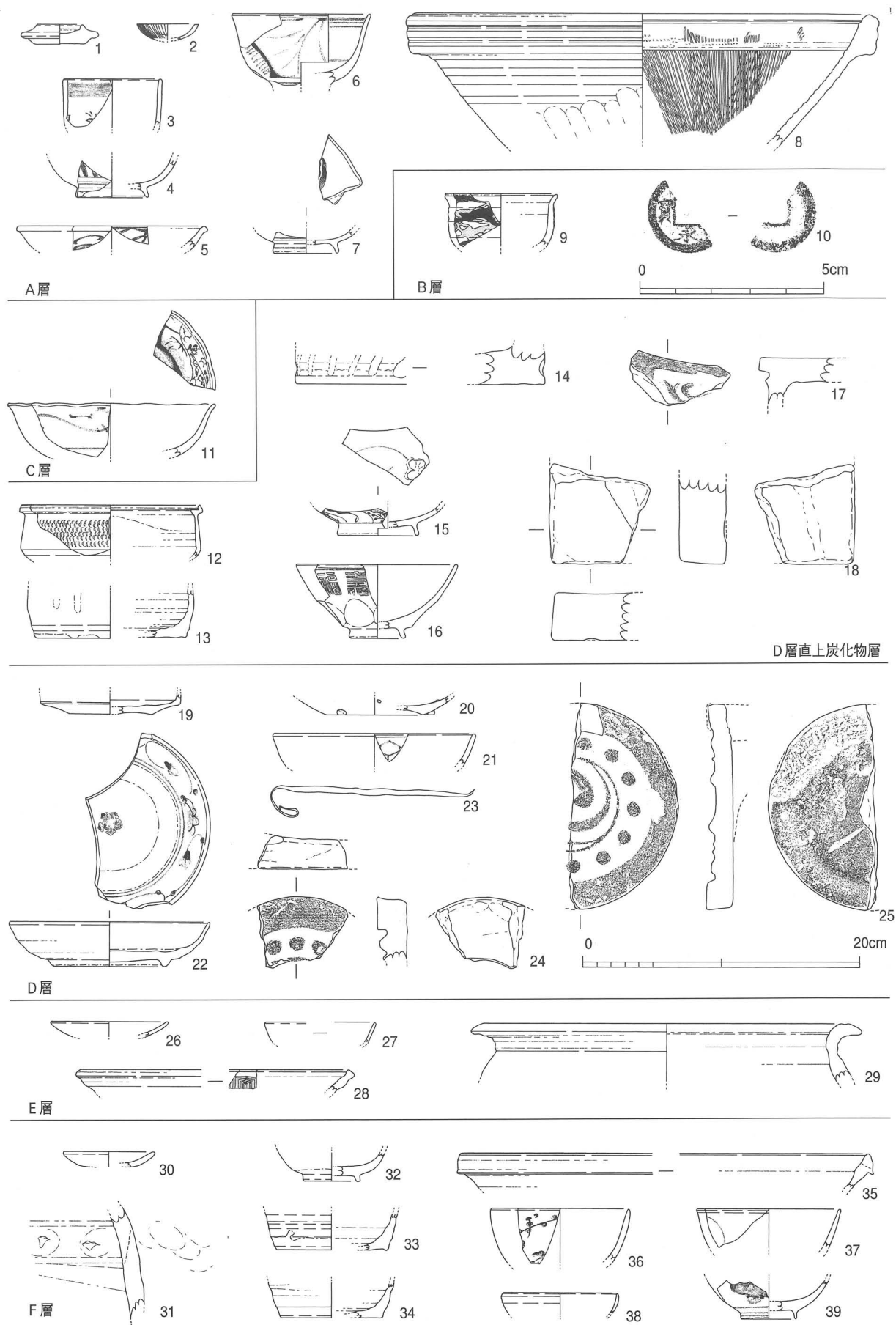
C層から出土した遺物は、陶器・磁器・瓦等で、やはり近代に下る遺物が含まれていたが、その中で、染付磁器の11を図示した。11は口縁部が輪花の皿で、18世紀後半のものである。

塚の南東部のD層直上に広がっていた炭化物層から出土した遺物は、陶器・磁器・瓦や球根等の植物遺体であった。これらはⅢ期の塚の構築以前にⅡ期の塚上の草木や瓦礫をまとめて焼却したものであろう。12は体部にトビガンナのある施釉陶器行平埴、13は白色・褐色釉を施した陶器の壺底部である。14は備前焼で器壁の厚さから大型甕の底部片と考えられる。15・16は染付磁器碗で、15は幕末の広東碗、16は銅印版を用いた近代のものである。17は軒平瓦、18は塼とみられるが、近世以後のものであろう。

D層から出土した遺物は、陶器・磁器・瓦・銅製品で、近代に下る遺物よりも近世の遺物の方が多い。19は施釉陶器向付または蓋、20は施釉陶器行平埴の底部である。染付磁器は21・22の2点を図示した。21・22ともにくらわんか手の皿であり、22は見込みにコンニャク印判の五弁花がみられ、蛇の目釉剥ぎを施しているので、18世紀後半頃とわかる。21はこれより若干新しいものであろう。銅製品の23は長さ約14.6cmの薄く細長い板状のものであるが、用途は不明である。24・25はどちらも三巴文の軒丸瓦である。

E層から出土した遺物は、土師質土器・陶器・磁器で、E層が盛土層であるためか、この層から出土したものは特に破片が小さい。26は白磁、27は施釉陶器でどちらも皿であろう。28は三島唐津の施釉陶器鉢である。これらの年代については、江戸時代の範疇でとらえることができよう。一方、29の丹波焼甕は、短く外反する口縁部内面に沈線状に退化した凹線がみられるので、15世紀の資料と考えられる。

F層から出土した遺物は、土師質土器・陶器・磁器で、中世～近世の遺物に限られる。30は土師質土器小皿である。31は備前焼体部で、胎土の様相から中世に遡る可能性がある。32は高台露胎の京焼系施



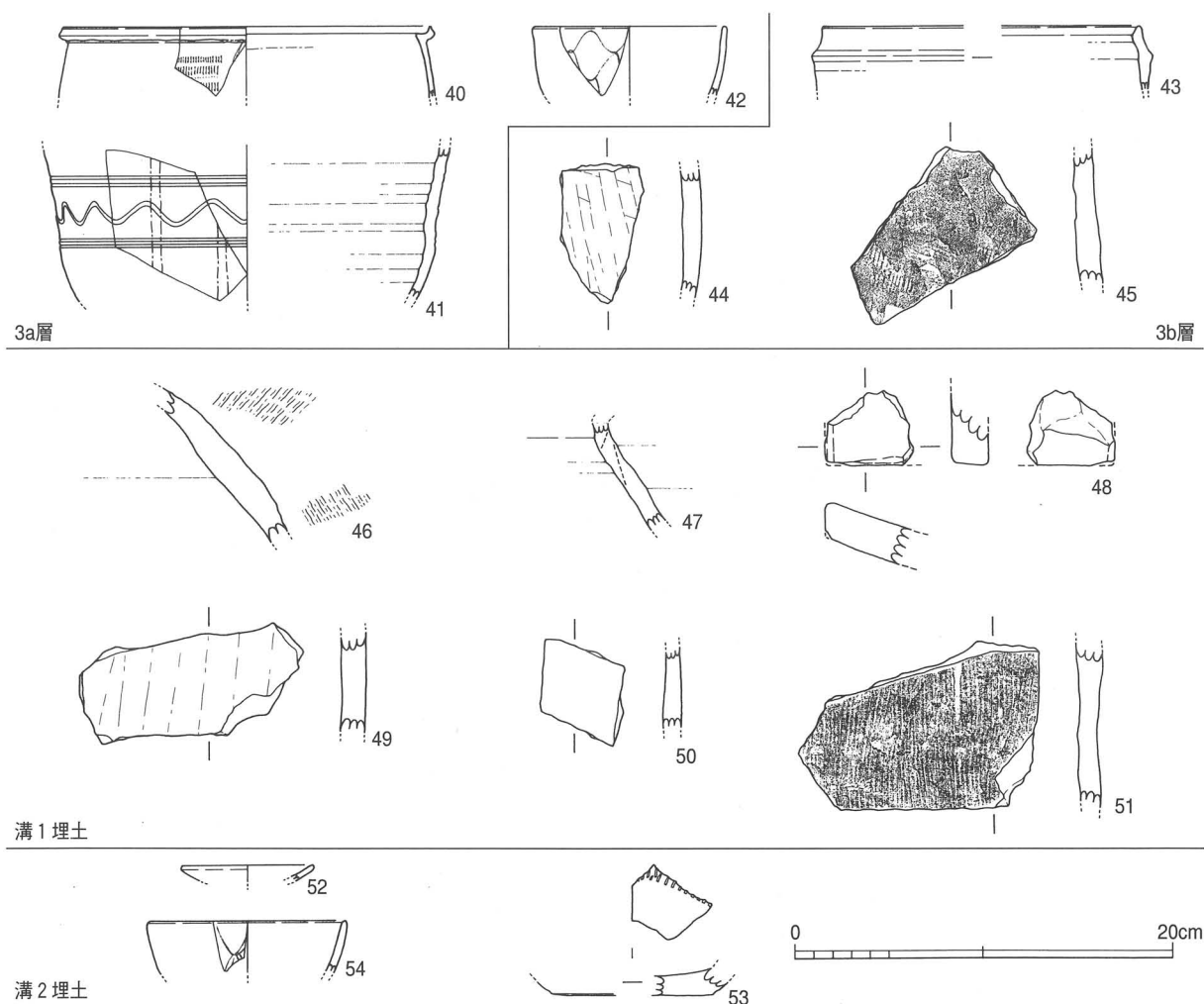
第29図 元塚出土遺物実測図 1 / 4, 10のみ 2 / 3

釉陶器碗である。33～35は丹波焼で、33・34は褐釉を施した小壺底部、35は甕の口縁部である。35は口縁部の断面形が三角形なので、17世紀に下るものである。36・37はくらわんか手の染付磁器丸碗である。38は白磁皿と考えている。以上はF層でもF1層で検出されたもので、江戸時代中期のものが主流である。39は周溝底の埋土であるF2層から出土している。外面にコンニャク印判の模様のみられる染付磁器丸碗であり、やはり、江戸時代中期（18世紀後半）のものといえる。（白谷）

(2) 東区および溝1・2出土遺物（第30図40～54、図版7）

東区および溝1・2から出土した遺物は、須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦・石造物等である。この中には、瓦質土器や備前焼・丹波焼片のように中世に遡るものが含まれており、当該期の遺構の存在を示唆しているといえよう。なお、図示した遺物では、40～45が溝1埋土の直上層にあたる基本土層3層、46～51が溝1、52～54が溝2から出土したものである。

40～42は3a層、43～45は3b層から出土している。40は施釉陶器の行平埴で、体部外面にトビガンナがみられる江戸時代後期のものである。41は褐色の釉の掛かった丹波焼甕体部片で、江戸時代後期のものであろう。42は染付磁器で、くらわんか手の丸碗である。このように、3a層からは、江戸時代の遺物が出土している。43は土師質土器で、16世紀代の播磨型土埴の可能性があり。44は須恵器体部片と



第30図 東区および溝1・2出土遺物実測図 1 / 4

みられるが、器形や時期は不明である。45は備前焼で、中世に遡る大甕体部片である。

溝1から出土した遺物では、46が最上層(①・②層)、47・48が上層(③層)、49～51が下層(⑦～⑨層)から出土している。46は土師質土器または瓦質土器の体部片で、外面に平行タタキが認められ、中世の甕の蓋然性が高い。47は丹波焼の甕の頸部で、胎土から14～15世紀のものと推測される。48は平瓦である。49～51は焼締陶器の体部片で、中世の備前焼の可能性が高い。備前焼ならば胎土から、49は15～16世紀、51は15～16世紀と考えてよかろう。このように、溝1から出土した遺物は、大凡、中世に限定されるものである。

溝2の出土遺物は、土師質土器・陶器・磁器・瓦等の小片である。図示した資料は⑤～⑦層から出土したもので、52は柿釉の灯明皿、53は明石・堺系の焼締陶器播鉢、54は染付磁器碗である。これらはすべて、江戸時代中期以後のものであり、溝2の埋没がそれより古くならないことの証左となろう。(白谷)

(3) 石造物(第31図、図版8)

今回の調査では、Ⅳ期元塚上に設置された石塔を構成する石造物3点の他に、石造物が14点出土した。それらの内容は、五輪塔空風輪7点(1～7)、火輪2点(8・9)、水輪3点(10～12)、地輪1点(13)、一石五輪塔2点(14・15)、石仏1点(16)、反花座1点(17)である。これらの石造物は、すべて花崗岩製であり、六甲花崗岩であると考えられる。

Ⅳ期元塚上の石塔の他、石造物が出土した位置は、塚南西部周溝、溝1であり、いずれも造立された本来の状態を保っていなかった。出土位置および層位の詳細は、9・13・17がⅣ期元塚上の石塔(第18図)を構成していた部材であり、8が塚南西部F1層(第24図)、3・15が溝1最上層(①・②層)、1・2が溝1④層、14が溝1⑤層、4～7・10～12・16が溝1⑧層(第26・27図)である。

次に石造物について、種類ごとに記述していくが、その製作年代については紀年銘を有するものがないため、先学の研究〔市本・瀬戸2001、川勝1957・1978、西山2003、藤澤2001、森屋・市本2000〕に基づいて形態と法量から比定した。

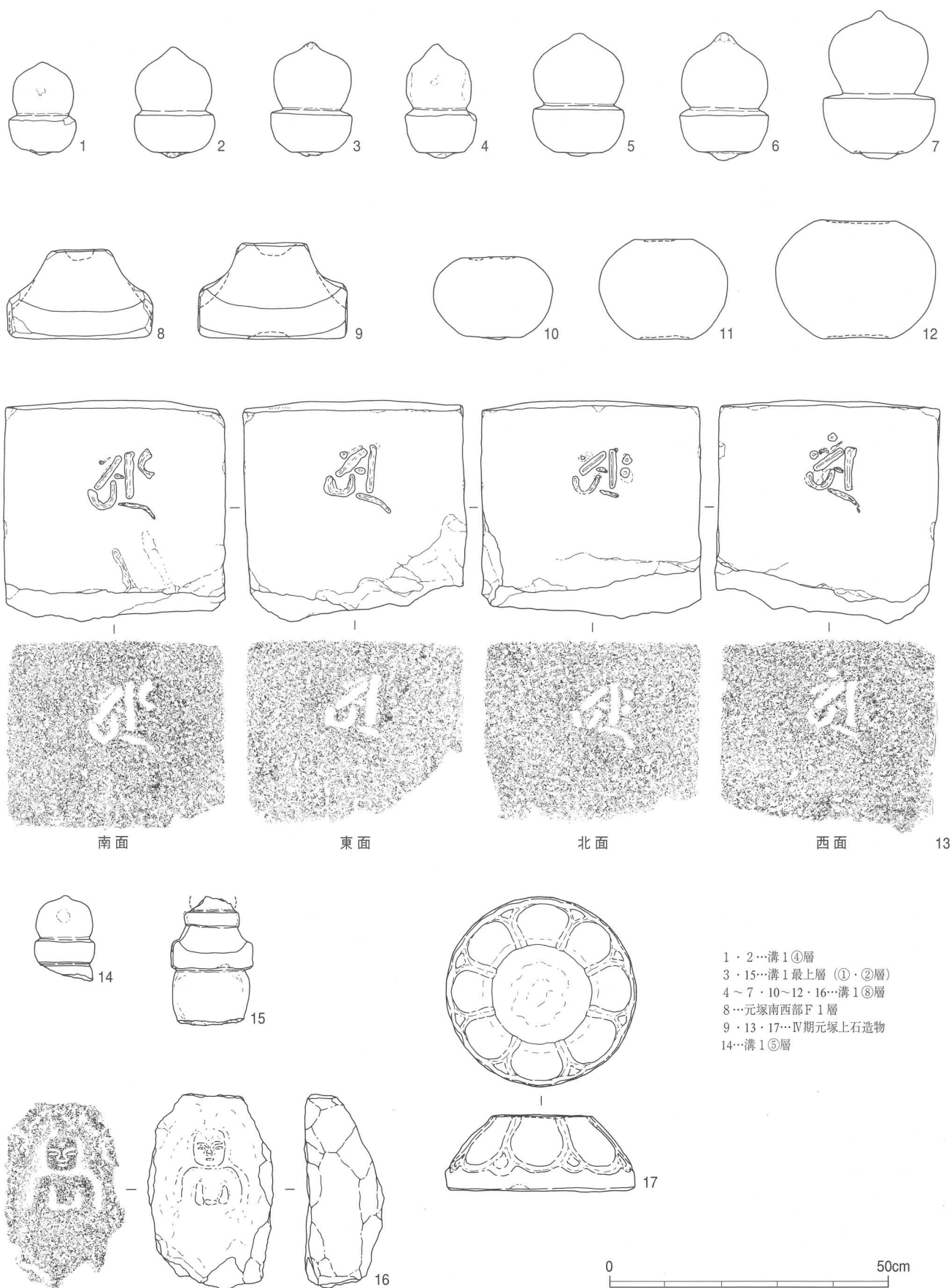
①五輪塔

五輪塔は、各部材に分けて記述する。

空風輪(第31図1～7) いずれも空輪と風輪は一石から作られており、風輪上端が上方へ傾斜して、その上に空輪が付く。風輪下面にはほぞをもつ。各空風輪の大きさは、空輪：高・最大径、風輪：高・最大径、ほぞ：高・径の順に記すと、1が空輪：9.6cm・11.3cm、風輪：6.7cm・12.3cm、ほぞ：0.6cm・3.9cm、2が空輪：11.5cm・13.9cm、風輪：7.6cm・14.6cm、ほぞ：1.0cm・3.9cm、3が空輪：12.3cm・14.1cm、風輪：7.7cm・14.8cm、ほぞ：0.8cm・4.3cm、4が空輪：11.9cm・11.8cm、風輪：7.9cm・12.9cm、ほぞ：1.0cm・4.7cm、5が空輪：12.9cm・16.4cm、風輪：8.7cm・16.7cm、ほぞ：0.7cm・3.9cm、6が空輪：13.7cm・15.5cm、風輪：8.0cm・16.1cm、ほぞ：1.6cm・5.2cm、7が空輪：15.1cm・17.9cm、風輪：10.8cm・20.2cm、ほぞ：1.1cm・6.3cmである。形態では、空輪と風輪の境界が比較的明瞭に屈曲するもの(7)と境界がやや鈍いもの(1～6)が認められる。

製作年代については、7が14世紀後半まで遡ると考えられ、1～6は15～16世紀に比定される。

火輪(第31図8・9) 8は軒隅の端部が上下ともに欠損しているが、軒部は隅が中央から緩やかに反り上がり、下面は四隅が反り上がっている。上面にはほぞ穴をもつが、下面には認められない。高さは16.5cm、軒部の厚さは中央で4.5cm、隅で6.2cm以上、幅は上端・下端ともに26.6cmである。軒端から



第31図 石造物実測図 1/10

9 cmあたりから反り始める。四注の屋根の流れも全体にわたって反転する。軒部下面四隅が約1.5cm反り上がる。上面のほぞ穴は隅円方形を呈し、一辺5.8cm、深さ2.0cmを測る。9は軒部の隅が中央からやや強く反り上がり、下面は四隅が反り上がる。上面と下面には、ほぞ穴が穿たれている。高さは17.5cm、軒部の厚さは中央で5.1cm、隅で7.4cm、幅は上端・下端ともに27.1cmである。軒端から11cmあたりから反り始める。四注の屋根の流れも全体にわたって反転する。上面のほぞ穴は隅円方形を呈し、一辺7.8cm、深さ2.4cmを測る。下面のほぞ穴は隅円方形を呈し、一辺7.8cm、深さ2.4cmを測る。

製作年代については、8・9ともに15世紀に比定されるが、9の方が軒部隅の反り上がりが強く、8より後出すると考えられる。

水輪（第31図10～12） 10は扁平で、ほぞを上面と下面にもつ。高さ14.6cm、最大径は上端から6.1cmの位置で21.6cmを測る。ほぞは高さ0.4cm、径4.9cmである。11はやや扁平で、上下面ともにほぞは作られずに凹面を呈している。高さが18.3cm、最大径は上端から8.3cmの位置で23.2cmを測る。12はやや扁平で、11と同じく上下面ともにほぞは作られずに凹面を呈している。高さが21.6cm、最大径は上端から10.1cmの位置で28.8cmを測る。

これらの製作年代は、空風輪や火輪と同時代のものと考えられ、15～16世紀であろう。

地輪（第31図13） 下端は整形されていないことから、埋め込み式であることがわかる。上面にほぞ穴はなく、平坦である。四面には梵字が刻まれている。高さは39.4cmで、側面高は39.2cmを測る。側面高の内、整形されている部分の高さは22.8～33.2cmである。幅は39.2cmである。四面に刻まれる梵字は、ア字の四転、「𑖀」(東ア)、「𑖁」(南アー)、「𑖂」(西アン)、「𑖃」(北アク)を配している。この四字は、胎蔵四仏の種子とも、四門の梵字の各最終の字とも解釈できるものである。

製作年代は、15世紀に比定される。

②一石五輪塔（第31図14・15）

14は空輪・風輪の部位しか残存していない。空輪・風輪ともに上方からみると円形ではなく、隅円方形を呈する。空輪が高さ7.9cm、最大幅10.4cmを測り、風輪は高さ4.4cm、最大幅11.0cmである。15は空輪と地輪の部位が欠損している。風輪・水輪はやはり円形とはならず、角が丸い方形である。風輪は高さ2.7cm、最大幅10.1cm、火輪は高さ8.0cm、最大幅14.9cm、水輪が残存高10.0cm、最大幅14.0cmを測る。製作年代は、14・15ともに16世紀に比定される。

③石仏（第31図16）

16は光背と仏像を一石で作る光背形石仏である。高さ35.4cm、幅22.9cm、厚さ14.3cmを測る。割石の一面に石仏を彫り出しており、光背裏面は、粗加工された状態のままである。下端部も粗加工で、土中に埋め込んでいたことがわかる。光背の形態は頂部がやや平らになっている。像容は阿弥陀如来座像で、表現は簡略化されており彫り込みは浅い。座像は腕より上半身となっており、腕部は左右の区別なく一本に表現されている。なお、石材下端から阿弥陀如来座像腕部までの高さは、約14.5cmである。製作年代は、15～16世紀に比定される。

④反花座（第31図17）

Ⅳ期元塚上に設置された石塔を構成する部材に転用されていた。直径約38.5cm、高さ14cmを測る。単弁の蓮華文は弱い線彫りで表現されており、花卉の表現は立体感がなく極めて粗いものといえる。花卉は八弁で小さな間弁を有するが、花卉の割付は曖昧で大きさは不均等である。上面は若干凹んでいるが、ほぼ平坦であり、下面は平坦である。詳細な製作年代はわからない。

（竹村）

第4章 まとめ

第1節 元塚の変遷

これまで述べてきたとおり、Ⅰ～Ⅳ期元塚には埋葬施設がまったく認められなかったことから、『古墳墓』と『経塚』以外の“塚”を『塚』とする概念〔坂詰1987〕にしたがい、いずれの時期の元塚も「塚」と認識する。その上で、各時期における元塚の性格について検討する。

Ⅰ期元塚は14世紀後半～15世紀に築造されており、その東方には溝1が形成されている。塚の築造方法をみると、洪積層（大阪層群）を削り出している。この方法は、当地域における塚の築造方法を考える上で重要な例証となろう。Ⅰ期元塚の性格については、溝1から出土した複数の石造物（14世紀後半～16世紀）から石塔群の近隣に存在した塚であったことがわかる。ただし、調査区から埋葬施設がまったく検出されていないことから、石塔群は狭義の墓域（埋葬）に伴うものではないと推測される。

Ⅰ期元塚築造後、17世紀までには溝1が埋没し、近世前半（17～18世紀）には新田開発により耕作土（3層）が形成される。その結果、18世紀までにはⅠ期元塚周辺の地表面が上昇している。溝2は18世紀に掘削されており、その際にⅠ期元塚の東部と北部を壊している。

Ⅱ期元塚は、18世紀中頃～後半にⅠ期元塚や溝2を埋めて築造されている。当該時期には『摂津名所図会』にもみえるように西国街道沿いに旧打出村の集村化が進んでおり（第32図）、Ⅱ期元塚が当村落における民間信仰の対象、あるいは街道沿いの地上標識などの性格をもって再築造されたと考えられる。また、Ⅱ期元塚に関する記述が『打出史話』（1940年印刷）にあり、元塚が親王寺の所有であったと記されている。ただし、その伝承の真偽は不明である。

20世紀に築造されたⅢ期元塚とⅣ期元塚については、文献からその築造契機を知ることができる。『芦屋郷土誌』（細川1963）によれば、1927年に当該敷地を購入した日綿実業株式会社紐育支店長山川氏が、敷地内にあった五輪塔1基を元塚上に保存して祀ったことが記されており、その際にⅢ期元塚が築造・整備されたと考えられる。

Ⅳ期元塚は、1977年に行われた神戸製鋼所(株)芦屋研修所の宅地造成の際に、本市教育委員会が元塚を現状保存するよう事業者へ協力を依頼した結果、庭の築山として整備されたものである。

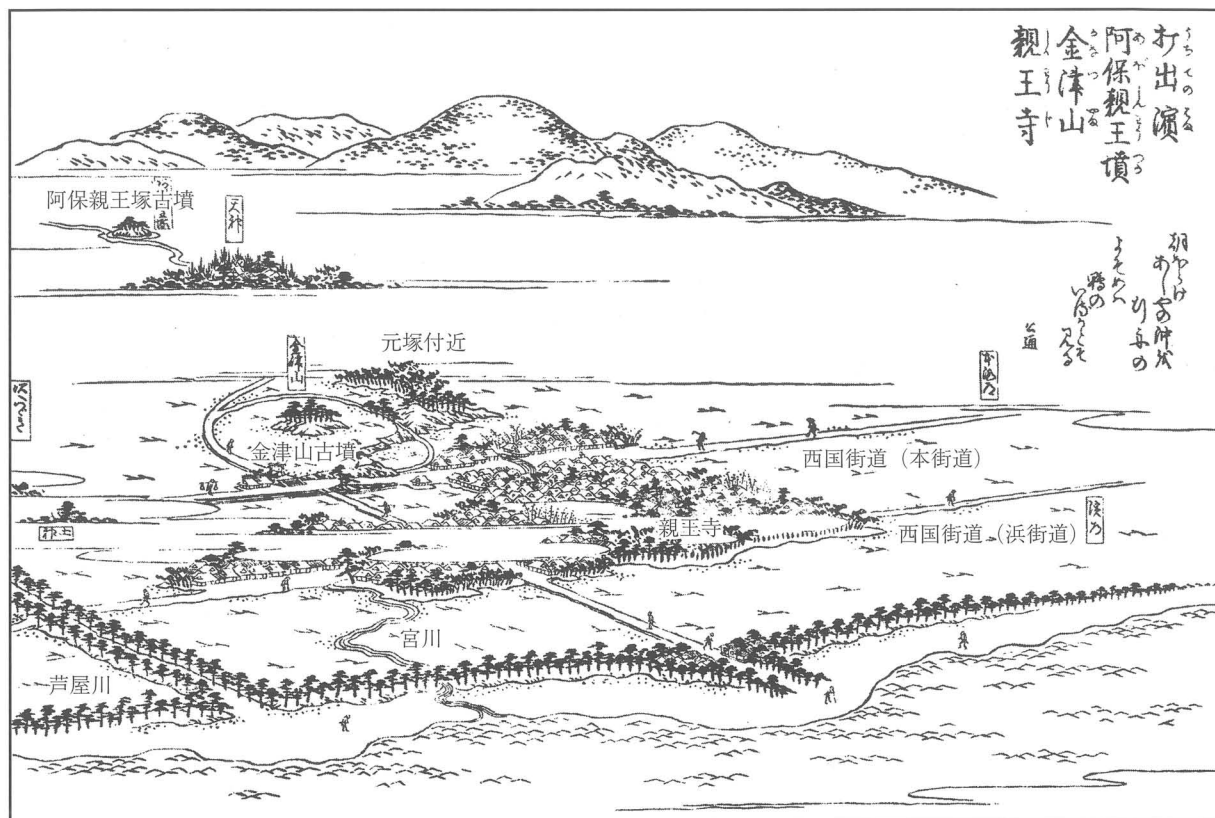
以上、Ⅰ～Ⅳ期元塚の性格について述べてきたが、次にその性格の変容について考える。

Ⅰ期元塚では、塚周辺の石塔群と何らかの関連をもつ施設であったことが推測される。また、段丘の縁辺部に立地することから、地上標識であった可能性も考えられる。

Ⅱ期元塚については、『打出史話』にある「親王寺の所有」が事実であるなら、親王寺の檀家を介して、旧打出村における民間信仰と深い関わりがあったことが推測される。親王寺の所有でない場合でも、個人が当塚を所有したとは考え難く、地域社会全体における民間信仰の対象であったと考えられる。

それに対して、Ⅲ・Ⅳ期の元塚は、当該敷地を所有する個人あるいは会社に帰属することとなり、地域社会との関係は断絶してしまったのであろう。

なお、溝1・2は、前者が14世紀後半～16世紀のもので、後者が18世紀のものであり、同時に存在していない。これらの溝の性格は耕作地に伴う用水路、または切り通しの道などの可能性があるが、判断することができない。ただし、両者とも周濠など、元塚の外部施設にはならないと考えられる。（竹村）



第32図 『摂津名所図会』にみえる江戸時代の元塚周辺（寛政8年〔1796〕刊行、〔臨川書店1996〕に加筆。）

第2節 元塚と周辺の伝承墳

本節では、元塚周辺にあたる宮川中・下流域に分布する伝承墳について検討したい。

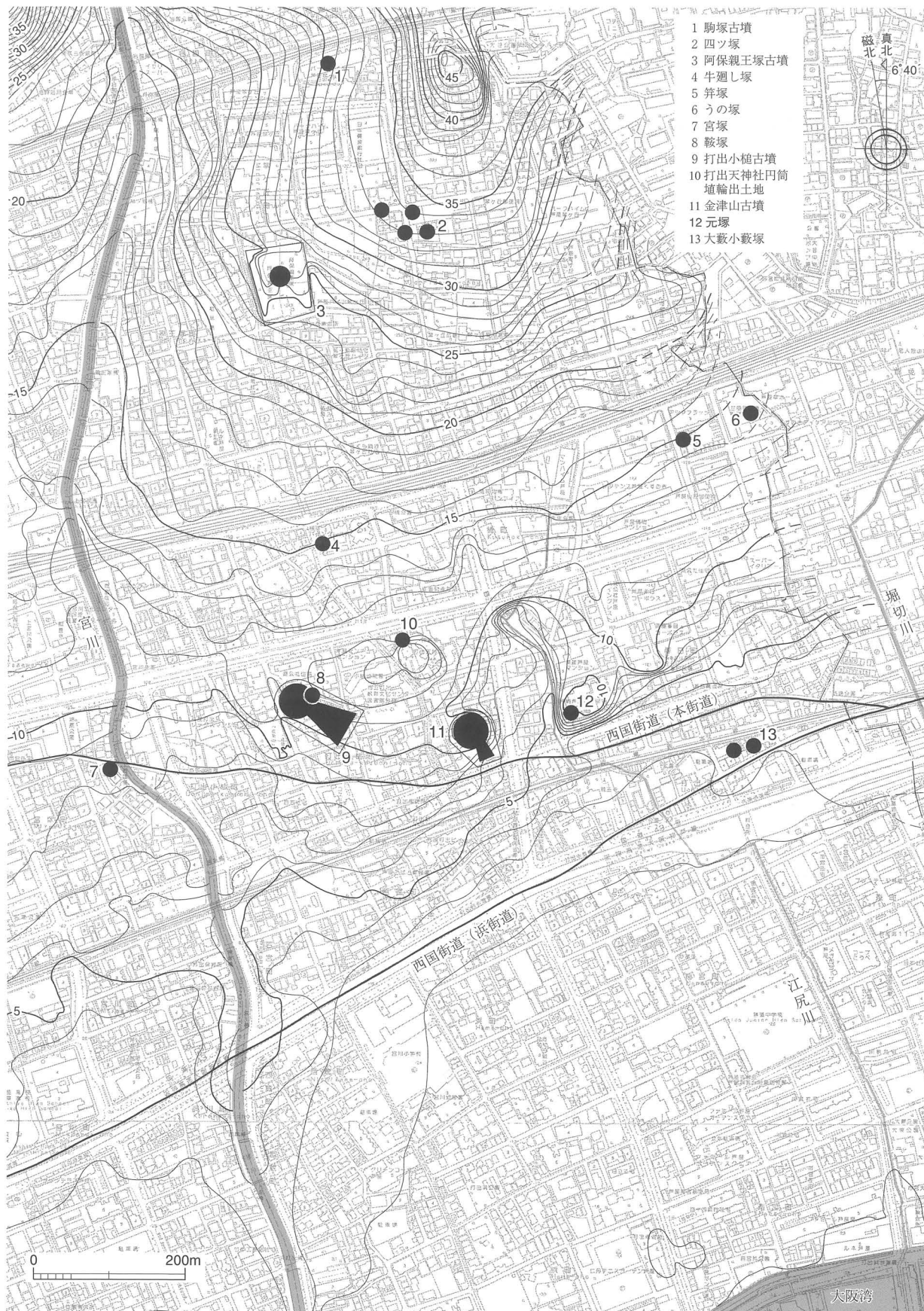
伝承墳および古墳の現状

本地域に分布する伝承墳には、牛廻し塚、筭塚、うの塚、宮塚、鞍塚、元塚、大藪小藪塚がある。その他に、本来は古墳・古墓であるにもかかわらず、近年まで塚として認識されてきたもの〔今西・森岡1973〕として、駒塚古墳（馬塚）、四ツ塚、阿保親王塚古墳、金津山古墳（黄金塚・金塚）がある（第9・33図）。これらの現状をみると、伝承墳では近現代の開発によって封土が完全に破壊されてしまっており、地上に遺存するものはまったくない。一方、古墳では、阿保親王塚古墳が江戸時代に長州藩毛利家によって大修築され墳丘が方墳状に改造されており、その当時の状況のまま、現在、宮内庁書陵部により管理されている。金津山古墳は前方部が中世の耕作地開発によって削平を受け、後円部のみ円墳状に残存している。それ以外の古墳は、近世・近代の開発によって地上から姿を消している（第9図）。

ところで、伝承墳は近現代の宅地開発、区画整理や鉄道の敷設などの開発によって消滅したが、そこには、近世から近代へ移行するなか、大きく変化する政治や経済動向を背景として、伝承墳（塚）が地域社会から切り離されていったことが推察され、近代以降における地域社会の変容あるいは村落共同体の解体の過程がうかがえる。

伝承墳の立地

8基の伝承墳の立地をみると、①西国街道沿いに立地するもの（元塚・宮塚・大藪小藪塚）、②段丘縁辺部に立地するもの（元塚・うの塚）、③緩傾斜面に立地するもの（牛廻し塚・筭塚・鞍塚）などが



第33図 宮川中・下流部左岸域微地形復元および塚・古墳分布図 1/7500

認められる（第33図）。これらの立地条件以外にも、例えば旧打出村の村落構造との関わりなど、多角的な視点から検討する必要があるが、今後の課題としたい。

伝承墳の構造および施設

伝承墳の構造が具体的に解明されているのは、発掘調査が行われた元塚と筭塚に限られる。筭塚の形態は長方形を呈し、その規模は東西12m、南北20m余、高さ約2mを測る〔森岡1986b〕。墳丘上には「筭塚」が刻された石碑が設置されていた。外部および内部施設はまったく確認されておらず、「塚」であったと考えられる。築造方法は第1トレンチでは洪積層（大阪層群）から形成されており、第2トレンチでは人為的な盛土が認められた。基盤層を削り出す築造方法はⅠ期元塚と共通しており、特徴的である。築成時期は明らかでないが、近世である可能性が高い。

ところで、『打出史話』によれば、伝承墳には数株の樹が生えていたようである。その樹種をみると、牛廻し塚・筭塚・うの塚には松、宮塚には柃櫨の樹が生えており、大藪小藪塚には女竹が密生していたと記されている。『芦屋郷土誌』〔細川1963〕では、元塚に松と榎が生えていたと記されているが、今回の調査ではⅣ期元塚上に生えていた樹種や樹齢を記録できておらず、悔やまれる。

伝承墳にまつわる説話・伝承

元塚に関わる伝承では、『打出史話』の筭塚に関する文中に、「元、うの塚とともに親王寺の所有であった」と記されている。また、近年まで周辺地域の人々からは「蛇塚^{へびづか}」と呼ばれていたようである。

元塚以外では、筭塚、鞍塚および黄金塚（金津山古墳）に伴って、阿保親王にまつわる伝説が残っている〔細川1963、勇・藤岡1976、森岡・明尾・和田1993〕。

宮川中・下流域の伝承墳の性格

発掘調査が実施されている元塚と筭塚を比較すると、両者ともに埋葬施設は検出されておらず、「塚」であると考えられる。

本地域の伝承墳の性格はわからないが、「塚」であった場合、打出村や西国街道との位置関係や伝承・説話などから、民間信仰対象や交通の地上標識などであったのではなかろうか。（竹村）

第3節 おわりに

今回の発掘調査によって、元塚の築造が中世まで遡り、その構造が解明されたことは大きな成果である。さらに、築造から現代に至るまでの元塚の変遷や性格の変容を検討できた意義も大きいと考える。

ところで、元塚の発掘調査結果をみると、大変地味である。しかし、近畿地方で実施された塚の発掘調査例が極めて少ない現状において、今回の調査結果は近畿地方の塚を研究する上で貴重な例証となるだろう。

本書は埋蔵文化財の発掘調査報告であるため、他分野からの検討は控えたが、元塚の性格を解明するためには、民俗学をはじめ様々な分野からの学際的な調査・研究が必要不可欠である。また、本章でも少し触れたとおり、本塚を含めた伝承墳（塚）を検証することによって、近代化における地域社会の変容についても考察できそうである。これらについては、今後の課題としたい。

最後に、中・近世において、打出の人々にとって大切な存在であったであろう元塚は、今回消滅してしまった。しかし、発掘調査が実施されたことで、図面と写真による記録を後世に伝えることができる。今後、打出地域の歴史を考える上でこれらの資料が広く活用されることを望む。（竹村）

付 章 元塚断章 — 30有余年前の考説から —

昨今の著しい経済不況は、営々と市内に残されてきた遺跡の存在形態や未来への保存・継承の動きを大きく変え抛射しようとしている。昭和40年代や50年代に、事業地であっても現状保存や地下保存の保護に努め、何とか今日まで操守命脈を保ってきた遺跡の多くが、周知の上では地権者や遺跡分布地図にある程度徹底されているにもかかわらず、次期、次世代の再開発によりもはや代務叶わず維持保存でなくなってきたからである。このたび発掘調査された元塚もそうした数奇な経緯を辿った遺跡の一つであり、調査後遺憾ながら消滅した。本章では、不弁ながらこの元塚周辺をめぐる30有余年前になる一昔前の動静を古いフィールド・ノートに求め、疎んじられつつある“塚”の史的意義を多少なりとも追い求めてきた芦屋の文化財保護行政史、あるいは郷土の考古学史の一齣を記録の上にとどめておきたい。

昭和40年代後半といえば、市内に遺存した塚地名や塚に関わる伝承、塚の性格をめぐる議論がにわかに活発化した時期であった。ちょうどその頃、芦屋市史の編纂事業が考古・古代・中世の諸資・史料の集大成を図る資料篇1の刊行を目指して、その準備作業の唾手真つ盛りであり、市内に残る塚の名をもつ土地の考証と実査が始まっていた。元塚を古墳とする言説もあったからである。探求の気運は高まり、武藤 誠編集委員長、村川行弘委員の指導下、「古墳時代」の章の執筆担当である勇 正廣・藤岡 弘両氏とともに、当時は古墳か否かの観点を基礎に糺して再検討する作業に着手していた。現状都市基本図に塚の比定地を落とし、1箇所ずつ現地を実査したのもこの時機であった。また、当時市の嘱託として疲憊をおして市史編集室に勤務する『芦屋郷土誌』の著者、細川久吉氏と隣り合わせて仕事をする機会を丸1年の間、1週間に1度の割合で得、岩本昌三氏らとその間に招呼の機会をみ、芦屋の塚と地名、打出と元塚についても随分聞き取ることができたのは、今から振り返れば幸いであった。明治30年生まれの細川氏はすでにご高齢であり、その直後にご病気で亡くなられたので、今、その頃の聞き書きを迂遠ではあるものの、徒事とはみず次世代のひとびとに残しておくことは、時宜を得ていると判断される。

先ず第一に強調すべきことは、元塚の称呼は「元墓」であり、「もとばか」と呼ぶのが伝誦上正しいという点である。「もとづか」の呼名はもとよりこの30年程の間に定着した程度のものであり、本来は「もとばか」と継承すべきなのであろう。この間かように語彙を変容させてしまった経緯と誤謬については、私たちにも翻案の責任があると思う。本書の書名もそう訓ずるべきことが至要と考えられる。元塚の立地する場所は、大字「打出」字「寺開地」である。細川氏は「古寺の開墾地であり、小さなお堂があった」と言っておられたが、これは伝聞や窺測によるものと思われ、実見できたわけではないようだ。それよりも気がかりであったのが、東に隣接する字「古敷」であり、その23番には旧打出村の共同墓地があり、細川氏は「そとばか」と称していたことが注意にのぼった。親王寺境内の内墓に対する外墓であり、墓の造立年代については、内墓の下限年代を把握することも肝要であること、元塚の墓石と古敷の外墓との関係など、疑問なことがさまざま湧いてきた当時が思い起こされる。昭和30年3月に市霊園内に無縁塔が建設された際、市内各所の旧墓地の無縁仏を集合させて該塔が造られたため、昭和49年、著聞な田岡香逸氏や福澤邦夫氏の指導を得てその場所の予察調査も行ったが、中世に遡る石塔も存在するため、打出外墓との因果関係などが課題として残された。親王寺より後出の在地寺院の管掌下に置かれた新興葬地の展開など思料されることは際限なく広がる。「古敷」は「ふるしき」以外に「ふしき」とも訓じ、「伏木」「夫敷」「府敷」とも関係し、墓地は九畝余あって打出焼の窯元があったという。

さて、元塚に関しては、有期たった一日だけではあるが、かつて発掘を行ったことがある。芦屋市建設部区画整理課（旧都市整備課）から前日になって緊急連絡が入ったため、神戸製鋼所(株)芦屋研修所の一部区画整理事業工事に伴って昭和52年7月7日に実施したもので、周囲で重機が動き回る、調査とは言い難い悪条件下で行われた〔森岡1977〕。結果の詳細については、当時の簡報や本書の報告の記載に委ねるが、マウンドをもつ塚の市内初の調査としての意義があり、それ以降、斧塚、大藪小藪塚、牛廻し塚、うの塚、四ツ塚など数多の該当地ないしは近接地の試掘や確認調査が実施され、今日に至っている。その結果、マウンドを何らかの形で残している塚の多くが古墳とは異なるものであることが判明しつつある〔森岡1986b、竹村2001など〕。塚名の多くが阿保親王伝承に由来することを勘案すれば、それらの呼称の上限年代の一点が『摂陽群談』（岡田侯志 撰）の著された元禄14年（1701）にあることの指摘は許されてよいだろう。その一方で、物証に基づき6～7世紀の須恵器と横穴式石室墳の存在が確かめられ、享保年間に打出丘陵に群集墳の分布を想定した仮説の蓋然性が高くなった四ツ塚にも注意を払いたい〔森岡1992〕。元禄10年（1697）の『阿保親王塚御廟詮議』の「有来りの図」において、唯一伝承上の盟主との同時存在を示し、両者を関説する余地と信証を残すからである。

この間、昭和51年度から芦屋市都市整備課による春日土地区画整理事業が始まり、西国街道の街並みが次々と消滅していく過程で民家の間取りや民具の調査、街並み調査を進め、応急に調査記録を残したが〔田辺・森岡・位原1979〕、石造遺品が市内でも集中して多いこの地区については、芦の芽グループの基本データを基礎とした実査を進めており、この元塚に関しては西国街道（本街道）から仰ぎ見るランドマークとしての比高と立地に注目し、当時、春日地区内では最古相期に遡る五輪塔のパーツが存在することを重視した論議を行っている。この石造物の部材については、眼が不自由になられた田岡香逸氏を現場へ案内し、所見を聞き取りつつ略報を作っており〔田岡・森岡1976〕、当時は法量と様式論に立って戦国期天文年間に遡ることを確認したが、現時点では報告されているように、年代観はさらに古い方に動いている。石塔の造立が墳墓の標識として用いられ〔川勝1956〕、墓碑化したか、別目的の供養塔であったかについては、混交を含め石造物の多元的利用の視角から再度考究すべき課題といえよう。

かつて、古墳のもつ意味・時様が経年変化とともにどのように認知されるかについて共同研究を行い類型化を試みたことがある〔今西・森岡1973〕。その時に類別した「1. 古墳が古墳として知られている期間、2. 古墳が古墳としては知られていない期間、3. 古墳が古墳として再認識されて以降」の3タイプは、古墳をそのまま墓地や塚におきかえて議論することが可能であろう。元塚については、障碍にもなったであろう2の期間がどの程度あったか知る術をもたないが、塚の歴史性を類型化したイ～ヘ型に照らして、本来の意味や機能を失っていることからすれば、ハ型やニ型に比定することができる。歴然とした大型古墳であっても後世の荒廃と意味亡失はあり、踪跡に対する索莫とした伝承の分類〔森岡・和田1993a〕を基礎としつつ、古墳と塚の異同に焦点を照てた展示を企てたこともあったが〔森岡・和田1993b〕、それぞれの結末に歴史と民俗を踏まえての想察は未だかつて加えられたことがない。

30年以上もの劫膺を経て、元塚をめぐるのは、叙上のごとくいくつかの探求への試みがあった。しかし、その正体の解明や真諦にはほど遠く、その意義を限定することなく、諸説なるがままに、今回の発掘調査を迎えたことになる。現行の地方分権の進捗した兵庫県下の文化財行政指導下では、こうした塚も古墳でない限り、その築営年代により調査の対象であったり、非対象となる。慎重を期した二度におよぶ確認調査の目的の一部と本書の緊束が遺跡としての上限年代究明に向けられたことも当然のことであるが、今はかつて教唆を与えた賢能の細川氏の言を深悼しつつ尊重しておきたい。（森岡秀人）

引用・参考文献

- 芦の芽グループ 1968 「2. 石造遺品分布調査報告」『郷土史料室文化財所蔵品目録 石造遺品分布調査報告』＜芦屋市文化財調査報告第6集＞ 芦屋市教育委員会
- 芦の芽グループ文化財パトロール委員会 1973 『芦の芽 石造文化財』資料篇第4集 芦の芽グループ
- 芦屋市教育委員会 1979 『芦屋の生活文化史－民俗と史跡をたずねて－』
- 芦屋市教育委員会 2003 『元塚発掘調査現地説明会資料』
- 芦屋市教育委員会文化財課 2003 「タイム・トラベル in あしや－歴史と伝承の土地を発掘する－」『広報あしや』2003年（平成15年）11月15日号・No.880 芦屋市役所広報課
- 「芦屋のお地藏さん」研究会 2001 『「芦屋のお地藏さん」研究報告書』（財）芦屋市文化振興財団
- 勇 正廣・藤岡 弘 1976 「第3章 古墳時代」『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 市本芳三・瀬戸哲也 2001 「栗栖山南墳墓群で出土した石造物について」『日引』第1号 石造物研究会
- 今西純朗・森岡秀人 1973 「古墳の歴史的研究－八十塚13号墳をめぐる横穴式石室の二次的使用について－」『八十塚13号墳の測量調査概要報告』＜六甲南麓群集墳測量調査第2報＞ 六甲南麓群集墳測量調査団・芦の芽グループ考古学研究会・兵庫県立芦屋高校史学研究部
- 魚澄惣五郎編 1956 『芦屋市史』本編 兵庫県芦屋市教育委員会
- 唐澤至朗 2003 『民衆宗教遺跡の研究』 高志書院
- 川勝政太郎 1956 「石塔と墓碑」『日本考古学講座』第7巻 歴史時代（中・近世） 河出書房
- 川勝政太郎 1957 『日本石材工芸史』 綜芸舎
- 川勝政太郎 1978 『日本石造美術辞典』 東京堂出版
- 坂詰秀一 1987 「『塚』の考古学的調査・研究」『月刊考古学ジャーナル』NO.274 ニュー・サイエンス社
- 狭川真一 2002 「南北朝時代の墓制」『中近世土器の基礎研究』XVI 中世土器研究会
- 清水靖夫編 1995 『明治前期・昭和前期 神戸都市地図』 柏書房
- 竹村忠洋 2001 『平成12年度国庫補助事業 うの塚第1地点確認調査実績報告書』 芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋編 2002 『若宮遺跡（第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点）発掘調査概要報告書－若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果－』＜芦屋市文化財調査報告第38集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋・白谷朋世 2003a 『平成15年度国庫補助事業 元塚（第1地点）確認調査実績報告書』 芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋・白谷朋世 2003b 『平成15年度国庫補助事業 元塚（第1地点）第2次確認調査実績報告書』 芦屋市教育委員会
- 田岡香逸・森岡秀人 1976 『芦屋市内石造品基礎調査報告』II 芦屋市史編集室
- 田辺真人・森岡秀人・位原庸太 1979 「第3章 春日地区町並み調査」＜芦屋市文化財調査報告第9集＞『芦屋の生活文化史－民俗と史跡をたずねて－』 芦屋市教育委員会
- 辻 康男 2002 「第II章第1節 地理的環境」『若宮遺跡（第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点）発掘調査概要報告書－若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果－』＜芦屋市文化財調査報告第38集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 辻 康男 2003 「第II章第1節 遺跡をとりまく自然環境」『津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書－西部第二地区震災復興土地地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果－』＜芦屋市文化財調査報告第46集＞ 芦

芦屋市教育委員会

- 辻 康男・矢作建二・辻本裕也・田中義文・パリノ・サーヴェイ株式会社 2003 「付編 芦屋市内に所在する考古遺跡の自然科学分析」『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡（第128地点）発掘調査報告書―集落東端部の様相と知見―』＜芦屋市文化財調査報告第47集＞ 芦屋市教育委員会
- 永井久美男編 1996 『日本出土銭総覧 1996年版』 兵庫埋蔵銭調査会
- 西山昌孝 2003 「御影石の五輪塔―中間報告―」『日引』第4号 石造物研究会
- 野村幸希 1993 『歴史時代「塚」研究序説』 軋全舎
- 長谷川眞 2003 「中世丹波焼の変遷と技術移入・導入―杉本捷雄氏採集資料の再検討に向けて―」『中近世土器の基礎研究』XVII 中世土器研究会
- 兵庫県教育委員会 2004 『兵庫県遺跡地図』
- 藤澤典彦 2001 「歴史時代遺跡の年代―無紀年石造遺品年代推定の一方法―」『季刊考古学』第77号 雄山閣
- 細川道草 1963 『芦屋郷土誌』 芦屋史談会
- 武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘編 1971 『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘編 1976 『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 村上欣三 1910 「摂津国打出村の古墳」『考古界』第8篇第2号 日本考古学会
- 森岡秀人 1977 『芦屋市打出春日町 元塚の調査』＜芦屋市文化財資料（1977）遺跡調査NO.3＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1985 「15. 城山南麓遺跡 A 地点」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986a 「城山南麓 A 地点遺跡」『埋蔵文化財調査メモリアル'80～'85』＜芦屋市文化財調査報告第14集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986b 「51. 斧塚（伝承墳）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1992 「＜資料紹介＞翠ヶ丘・四ツ塚出土の須恵器―謎の四ツ塚の実態に迫る―」『なりひら』Vol.9 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人 2003 「阪神地方の古墓をめぐって」『摂津・藤ヶ谷古墓―藤ヶ谷遺跡第5地点・古代火葬墓の調査―』＜芦屋市文化財調査報告第48集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・明尾圭造・和田秀寿 1993 『古墳と伝承―移りゆく“塚”へのまなざし』 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人・和田秀寿 1993a 「（4）古墳でない塚の伝承」『古墳と伝承―移りゆく“塚”へのまなざし』 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人・和田秀寿 1993b 「伝承からみた阪神地方の古墳」『なりひら』Vol.12 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人・竹村忠洋編 1999 『若宮遺跡（第1・2地点）発掘調査報告書―震災復興住環境整備事業（芦屋市若宮町住宅1号館建設）に伴う埋蔵文化財事前調査の成果―』＜芦屋市文化財調査報告第30集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋編 2001 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布図利用の手引き』＜芦屋市文化財調査報告第40集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷朋世編 1993 『平成4年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 打出小槌遺跡第7次地点・第2次地点・第3次地点』＜芦屋市文化財調査報告第23集＞ 芦屋市教育委員会
- 森屋美佐子・市本芳三 2000 「第7章第10節 五輪塔・石仏の分析」『茨木市佐保所在 栗栖山南墳墓群―国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う古墳群および中近世墓群の調査―』＜財大阪府文化財調査研究センター調査報告書第57集＞（財大阪府文化財調査研究センター）
- 山本三郎・久下隆史編 1992 『山陽道（西国街道）』＜歴史の道調査報告書第2集＞ 兵庫県教育委員会
- 臨川書店 1996 『摂津名所図会』＜版本地誌大系10＞（秋里籬寫著、竹原春朝斎画、寛政8年〔1796〕刊行）

写真図版

P L A T E



Ⅰ期元塚（南東から）



IV期元塚（南西から）



IV期元塚（東から）



IV期元塚上の石造物（南から）



IV期元塚北側裾の石垣（北西から）



元塚と金津山古墳、西国街道（東から）



東部確認トレンチ
北壁土層断面
(南西から)



東部確認トレンチ
北壁土層断面
(南東から)



第1次確認調査
元塚西トレンチ土層断面
(南西から)



III期元塚（南から）



III期元塚（南東から）



丸瓦組筒状遺構（北西から）



丸瓦組筒状遺構（南から）



II期元塚（南から）



II期元塚（南東から）



II期元塚（北西から）



II期元塚南東部の炭化物層（南から）



I 期元塚（南西から）

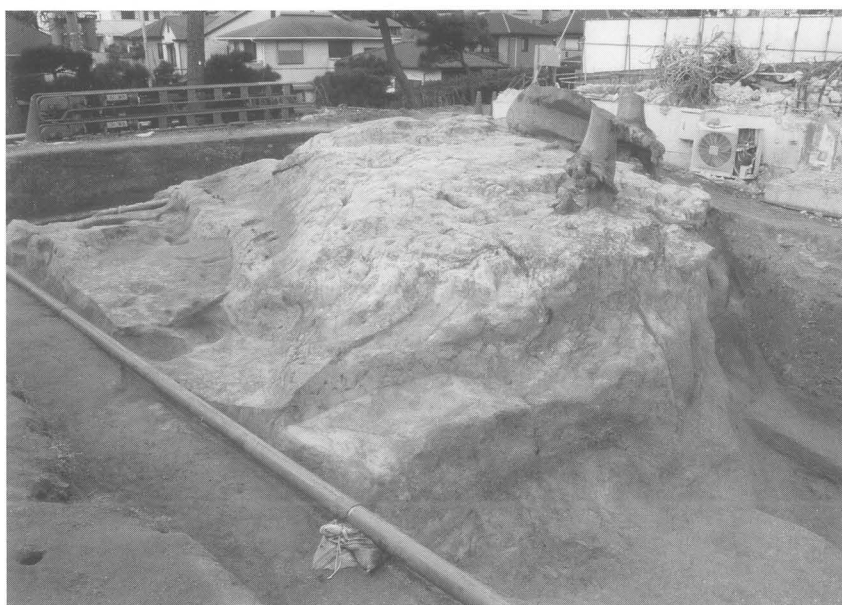


I 期元塚および東区（東から）

I 期元塚（南西から）



I 期元塚（南東から）



I 期元塚（西から）





溝1 石造物出土状況（南から）



溝1 石造物出土状況（南東から）



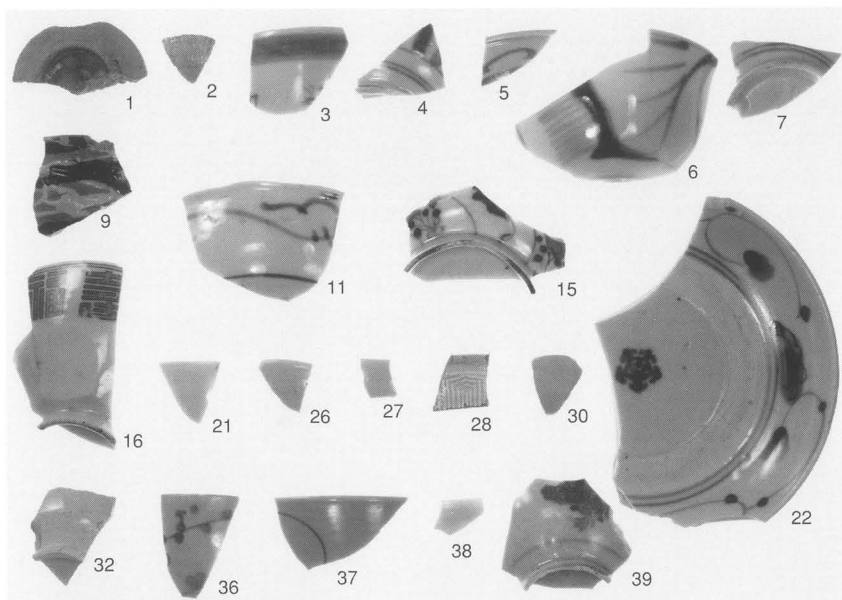
溝1 石造物1・2出土状況（南東から）



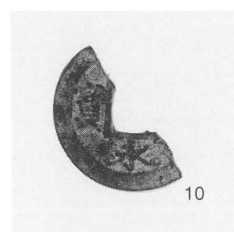
溝2（南から）



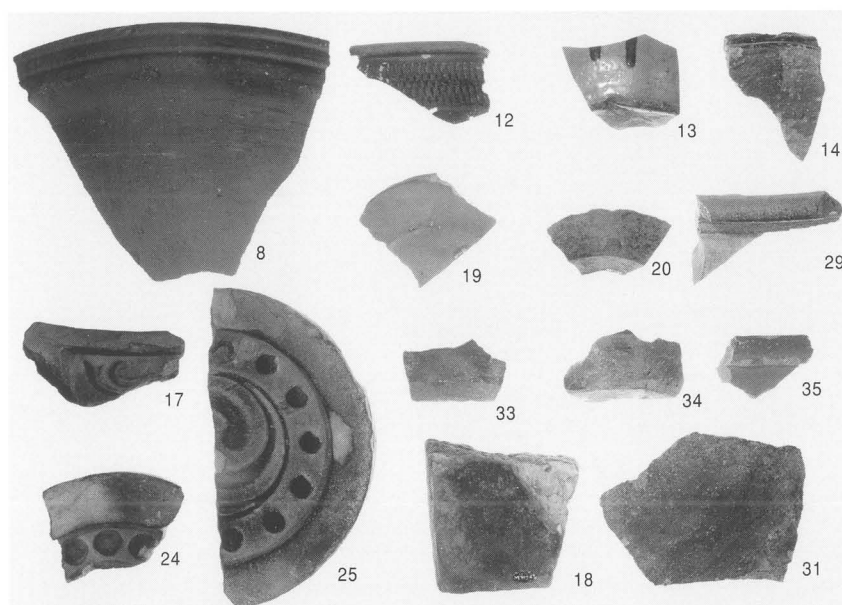
溝2 土層断面（南から）



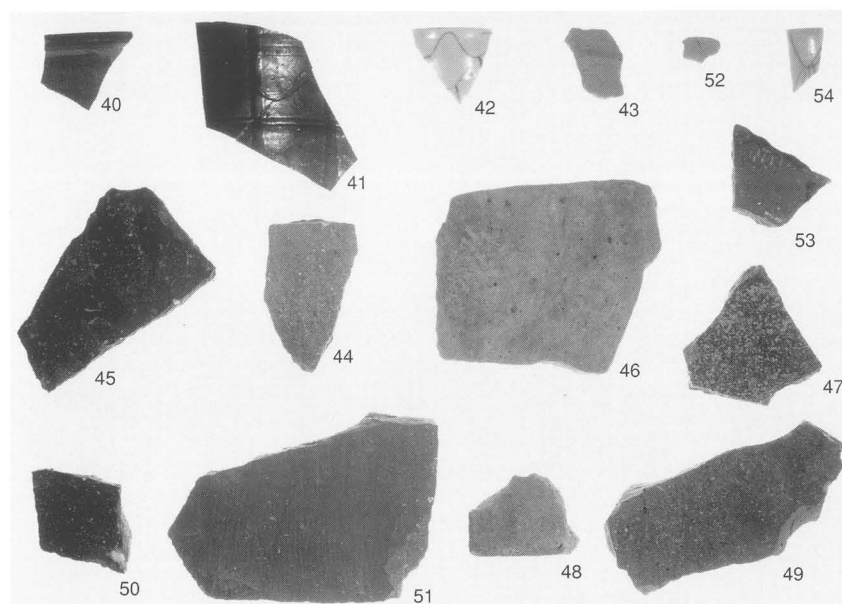
元塚出土遺物(1)



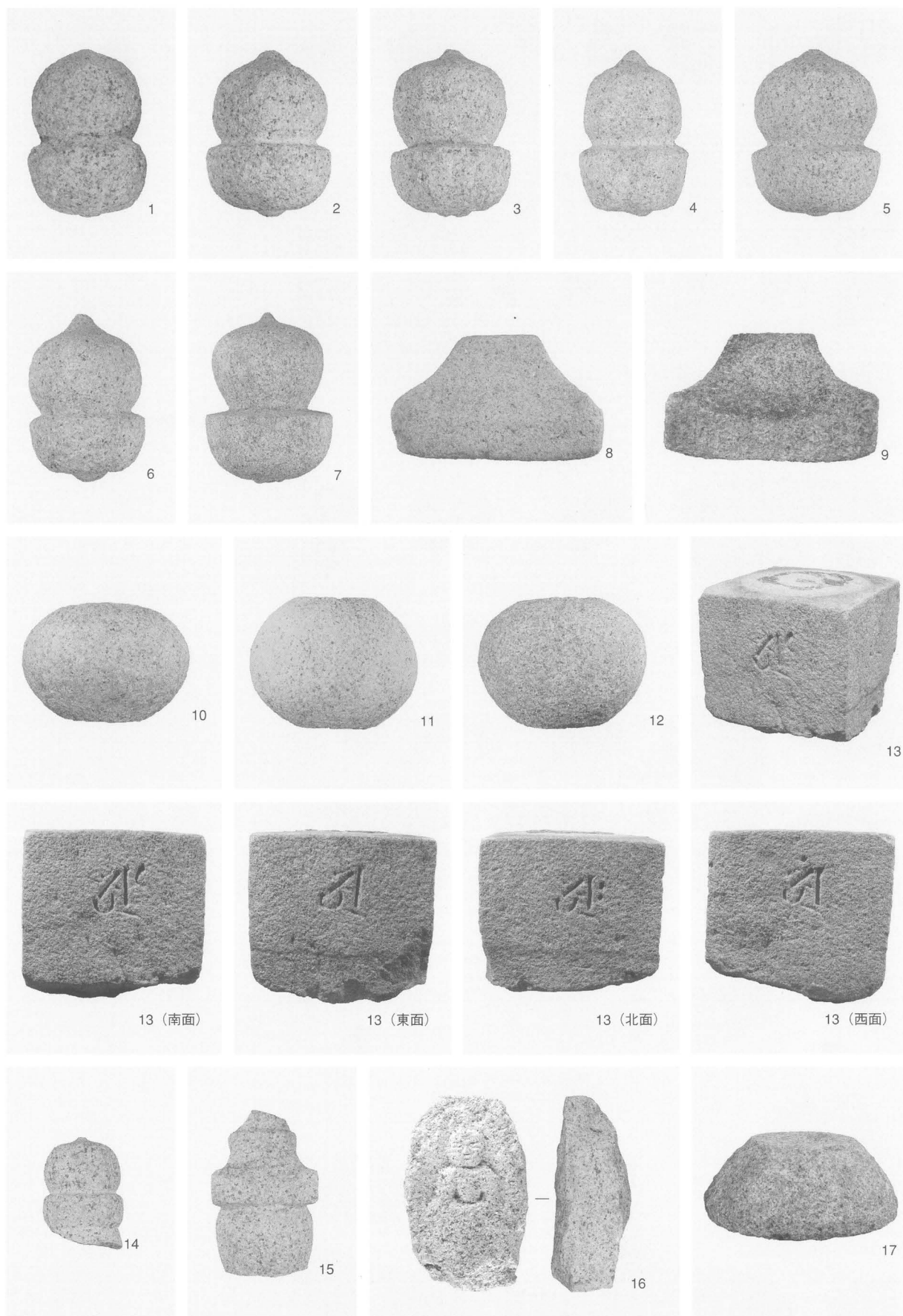
元塚出土遺物(3)



元塚出土遺物(2)



東区および
溝1・2出土遺物



石 造 物

報告書抄録

ふりがな	もとばかはくつちょうさほうこくしょ							
書名	元塚発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	第56集							
編著者名	竹村忠洋・白谷朋世（編）森岡秀人							
編集機関	芦屋市教育委員会社会教育部文化財課							
所在地	〒659－8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL 0797－31－9066							
発行年月日	2005年（平成17年）3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
もとばか 元塚	ひょうごけんあしやし 兵庫県芦屋市 かすがちょう 春日町349番地	28206	MT 1	34度 43分 47秒	135度 19分 14秒	第1次確認調査 20030724 }	5.3㎡	共同住宅建設に伴う事前調査
						20030730		
						第2次確認調査 20030901 }	23.2㎡	
						20030912		
						本発掘調査 20031104 }	165.0㎡	
						20031215		
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	塚	室町時代 } 江戸時代	塚・周溝・ピット・溝		須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦・銅製品・銅銭（寛永通寶）・鉄製品・石造物・骨片		14～15世紀築造の塚。中世石造物（五輪塔部材・一石五輪塔・石仏等）が17点出土。	

元 塚

平成17年 3 月31日 印刷発行

編 集 芦屋市教育委員会社会教育部文化財課
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町 7 番 6 号
TEL 0797-31-9066
FAX 0797-38-2089

発 行 芦屋市教育委員会
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町 7 番 6 号
TEL 0797-31-9066
FAX 0797-38-2089

印 刷 有限会社 岸本出版印刷
〒652-0806 兵庫県神戸市兵庫区西柳原町 3 番地29
TEL 078-681-2456 (代)
FAX 078-681-2457

